

長野県埋蔵文化財センター一年報14

1997



香坂山遺跡 A T 下層遺物出土状況



山の神遺跡出土異形部分磨製石器

序

財団法人長野県埋蔵文化財センターは、昨年度以来上田・長野の二事務所体制で、高速道路・新幹線関連の整理作業を中心にして、新たな発掘調査を加え、事業を推進して参りました。

本年度は、国道403号線バイパスに関連した屋代・大境遺跡、国営アルプスあづみの公園に関連した山の神遺跡、上信越自動車道2期線工事に関連した香坂山遺跡と、県道整備に関連した上五明条里水田址遺跡の発掘調査を実施しました。屋代木簡出土地点に近接した屋代・大境遺跡は古代の大規模集落の一端を調査し、山の神遺跡は住居跡こそ未発見ながら縄文時代早期の押型文期の集落に遭遇し、それぞれ絶好の資料を得ました。

高速道路・新幹線関連の整理作業はピークを迎え、長野自動車道関連の長野市石川条里遺跡の古墳時代編、上信越自動車道関連の長野市松原遺跡の縄文時代編、中野市・豊田村の諸遺跡、更埴市屋代遺跡の弥生・古墳時代編、北陸新幹線関連の全遺跡、国道18号線野尻バイパス関連の全遺跡などの報告書を刊行致しました。また、高速道路関連等のそのほかの遺跡につきましても、平成11年を目標に報告書を刊行させるべく、作業を進行させて参りました。

普及・公開活動といたしましては、企画展「千曲川流域の古墳文化」を、気候のよい10年3月～5月に開催中です。また、9年10月には全国埋蔵文化財法人連絡協議会の研修会を開催し、好評を博しました。

本書は平成9年度に当センターが実施した事業の概要をまとめたものです。ご参考となれば望外の喜びです。

日頃より当センターの事業にご協力・ご指導いただいている関係各位にお礼申し上げますとともに、一層のご支援をお願いする次第です。

平成10年3月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 戸田 正 明

目 次

口絵写真

- 香坂山遺跡A T下層遺物出土状況 (上)
- 山の神遺跡出土異形部分磨製石器 (下)

序 目次

I 発掘調査及び整理事業の概要

- 1 概要……………1
- 2 各調査事務所の事業
 - (1) 上田調査事務所
 - 概要……………2
 - 1 上五明条里水田址……………2
 - 2 香坂山遺跡……………3
 - 3 芝宮遺跡群ほか……………4
 - 4 中原遺跡群
 - ・真行寺遺跡群ほか……………6
 - 5 屋代遺跡群・更埴条里遺跡…8
 - 6 金井城跡・砂原遺跡ほか…10
 - 7 国分寺周辺遺跡群
 - ・弥勒堂遺跡ほか……………10
 - 8 更埴条里遺跡
 - ・屋代遺跡群ほか……………11
 - 9 篠ノ井遺跡群
 - ・築地遺跡ほか……………11
 - 10 浅川扇状地遺跡群
 - ・三才遺跡……………12
 - 11 笹原上第1・第2遺跡……………12

(2) 長野調査事務所

- 概要……………13
 - 1 山の神遺跡……………13
 - 2 屋代遺跡群大境遺跡……………15
 - 3 松原遺跡……………16
 - 4 村東山手遺跡……………18
 - 5 小滝・北ノ脇・前山田遺跡…20
 - 6 川田条里遺跡……………22
 - 7 春山B遺跡……………23
 - 8 榎田遺跡……………25
 - 9 牛出遺跡・風呂屋遺跡ほか…26
 - 10 日向林B遺跡
 - ・貫ノ木遺跡ほか……………26
- ### II 普及・公開活動の概要
- 1 企画展・現地説明会等……………28
 - 2 全国埋蔵文化財法人
連絡協議会研修会……………28
 - 3 指導・研究会・学習会……………29
 - 4 刊行物……………30
- ### III 機構・事業の概要
- 1 機構……………31
 - 2 事業……………32
- 平成9年度の役員及び職員

I 発掘調査及び整理作業の概要

1 概要

平成9年度の発掘調査は、上信越自動車道2期線工事関連・国道バイパス関連・国営公園関連・県道整備関連の諸遺跡を対象にして実施した。整理作業は長野自動車道関連・上信越自動車道関連・北陸新幹線関連・国道バイパス関連・治水ダム関連遺跡を対象とした。詳細は各事務所毎に報告するとして、概要を以下の一覧表に示す。

(1) 発掘調査

上信越自動車道関連

所在地	遺跡名	調査対象面積 ㎡	契約面積 ㎡	調査面 ㎡	調査延面積 ㎡	調査期間	調査員数	調査状況	主な検出遺構	主な出土遺物	次年度以降調査面積 ㎡	担当事務所
佐久市	香坂山	4,000	4,000	1	4,000	9・4・9 ～7・31	3	完了	旧石器時代ブロック6 縄文時代陥穴25	旧石器時代、石刃、 剥片、石核	0	上田

長野県土木部国道403号線バイパス、県道整備関連

更埴市	屋代・大境	4,000	4,000	4	10,000	9・4・14 ～12・19	2	完了	弥生時代中期～中世の 竪穴住居90、溝85、 掘建柱建物2	縄文～中世土器 金属製品等	0	長野
坂城町	上五明 条里水田	212	212	2	424	9・10・6 ～11・14	2	完了	平安時代住居跡5、 土坑6 時期不明水田跡4面	平安時代陶磁器	0	上田

国営アルプスあづみの公園関連

大町市	山の神	35,950	800	2	800	9・8・28 ～12・12	3	継続	縄文時代包含層 集石炉10	縄文土器、石器、 フレイク	未定	長野
-----	-----	--------	-----	---	-----	------------------	---	----	------------------	------------------	----	----

(2) 整理作業

事業別	所在地	遺跡名	作業内容	事務所
長野自動車道	長野市	石川条里	報告書刊行	長野
上信越自動車道	佐久市・小諸市 東部町・更埴市	芝宮・中原・中田・真行寺 更埴条里・屋代ほか	接合・実測・図版作成	上田
	更埴市	更埴条里・屋代の一部	図版作成・報告書刊行	上田
	長野市・信濃町 長野市 豊田村・中野市	松原・小滝・春山B・榎田・日向林B・東裏ほか 松原の一部 牛出・対面所・風呂屋ほか	接合・実測・図版作成 報告書刊行 図版作成・報告書刊行	長野 長野 長野
北陸新幹線	軽井沢町・御代田町 佐久市・浅科村・上田市 坂城町・更埴市・長野市	泉・金井城跡・長土呂・前田・砂原・中平田中島 国分寺周辺・弥勒堂・風呂川古墳・開畝 更埴条里・屋代・篠ノ井・築地・浅川扇状地ほか	図版作成・報告書刊行	上田
国道バイパス	信濃町	貫ノ木・西岡A	図版作成・報告書刊行	長野
治水ダム	茅野市	笹原上第1・第2	接合・実測・図版作成	上田

2 各調査事務所の事業

(1) 上田調査事務所

発掘調査の概要

調査遺跡数：2遺跡（上信越自動車道関連1遺跡、県道整備事業関連1遺跡）

調査面積：上信越自動車道関連 佐久市香坂山遺跡（4,000㎡）

県道整備事業関連 坂城町上五明条里水田址（212㎡）

上信越自動車道関連の香坂山遺跡は2期線のトンネル立坑建設に伴うもので、縄文時代の陥し穴土坑25基と旧石器時代の始良丹沢火山灰（AT）より下層の石器製作ブロック6カ所などが検出された。石器原産地での石器製作を知るうえに良好な資料と言えよう。上五明条里水田址は千曲川沖積地の縁での調査で、平安時代の集落とそれに後続する水田跡が検出された。

整理作業の概要

上信越自動車道関連と北陸新幹線関連の整理作業を継続して行った。北陸新幹線関連については、今年度が整理最終年度となり、遺構・遺物のトレースや編集、原稿作成等を行い、5冊の報告書を刊行した。

上信越自動車道関連は、昨年度からの整理を継続して進めており、更埴条里遺跡・屋代遺跡群については「弥生・古墳時代編」を刊行した。その他の各遺跡も遺構・遺物の検討や遺物の写真撮影等に入っている。

1 上五明条里水田址(県道整備事業関連)

所在地：坂城町大字上五明617他

調査担当者：上沼由彦・広瀬昭弘

調査期間：平成9年10月6日～11月14日

調査面積：212㎡

遺跡立地：千曲川左岸の沖積地

遺跡の特徴：平安時代の集落、以降の水田跡

検出遺構：竪穴住居跡5、土坑6、水田面4 出土遺物：平安時代陶磁器

遺跡は千曲川左岸の沖積地西縁に立地し、平安時代から近世にかけての水田址とされていた。今回の調査で平安時代の集落が検出され、遺跡の形成開始時期についてはその一端が明らかとなったが、上部に営まれた水田跡の時期は明確にできなかった。



第1図 上五明条里水田址の位置(1:100,000)(・印)



第2図 I区全景

2 香坂山遺跡(上信越自動車関連)

所在地：佐久市大字香坂山1番地

調査担当者：白田武正・宇賀神誠司

調査期間：平成9年4月9日～7月31日

上沼由彦

調査面積：約4,000㎡

遺跡の立地：香坂川源流に接する尾根

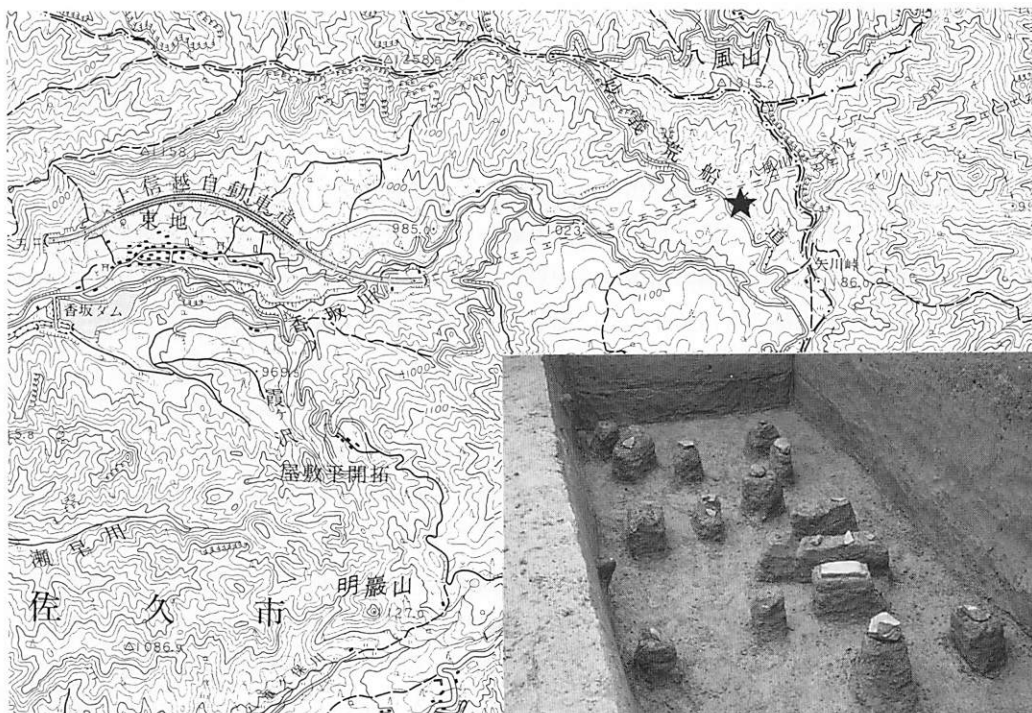
遺跡の特徴：縄文時代の陥し穴群、旧石器時代の石器製作址

主な検出遺構：陥し穴土坑25基、旧石器時代のブロック

本遺跡は、八風山の南、長野・群馬両県境にほど近い山中に位置する。今回の調査に先だつ試掘調査において初めて遺跡の存在が確認された。

縄文時代の土坑は、ほとんどが上部は長楕円形、底部は長方形の平面形で、底部に1基ないし2基の小ピットをもつ典型的な陥し穴が多かった。時期を把握し得る遺物の出土はなかった。

試掘の段階ではその有無は未確認だった旧石器時代の遺物は、下茂内遺跡の二つの文化層に相当する層を確認したため、槍先型尖頭器の時期の遺物の出土が予想された。しかし、当該期の遺物の出土はなく、さらに下層のAT(始良・丹沢火山灰)直下にガラス質安山岩の石核、剥片、チップの出土をみた。黒曜石、チャート、頁岩の剥片もいくつか出土している。ナイフ形石器に類似した石刃(頁岩)が1点出土した以外は工具の出土はなかったが、在地の石材だけでなく搬入された石材も含まれ、当地方の旧石器文化を考えるうえで新たな資料が提示されることとなった。



第3図 香坂山遺跡位置図(1:50,000)

第4図 遺物出土状況

3 芝宮遺跡群ほか(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18・整理作業)

担 当 者：藤原直人、上沼由彦

佐久盆地の北部、佐久市と小諸市の市境に位置する芝宮遺跡群・中原遺跡群（以下、それぞれ芝宮・中原）は、浅間山の南斜面に広がる田切り地形の台地上にある。その台地上には古墳時代後期から平安時代にわたる鑄師屋遺跡群・宮ノ反A遺跡・周防畑遺跡群・長土呂遺跡群等の大規模な遺跡群が展開し、現在整理作業をしている芝宮・中原もそれらの一角を形成するものである。

発掘調査は平成4年度から6年度にかけて行われ、平成7年度から本格的な整理作業を行っている。平成8年度は阪神大震災の復旧・復興のため整理担当者が派遣され、整理作業は1年間凍結となった。そのため今年度は2年目となる。検出された遺構は、芝宮遺跡群が竪穴住居跡245軒・掘立柱建物跡約90棟、中原遺跡群では竪穴住居跡140軒・掘立柱建物跡約90棟を数える。遺物に関してはテンバコにして1000箱を超える数が出土した。

平成7年度での整理作業では、遺構の図面台帳の作成・図面の修正を行い、遺物に関しては主に土器の注記・接合・復元、後半で一部土器の実測にとりかかった。

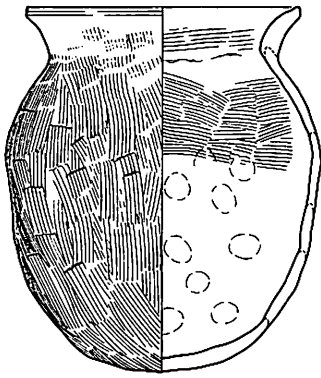
今年度は、遺構に関しては図面の修正をしながら第二原図を作成している。遺物に関しては、土器・石製品・鉄製品の実測作業が主体で、遺物の写真に関しては、予定数の約半数が終了している。また掘立柱建物跡については最終的な数を確定するため、現在図面上での検討を行っているところである。自然科学分析については、調査中に土坑のリン・カルシウム分析、カマド構築材の重鉍物分析、炭化木器の樹種同定を行っているが、今年度については、カマド内に残存した炭化物・骨の同定、石製品の石材鑑定を行った。

遺構についての分析は、遺物の整理作業が終了していないため細部にわたっての検討は期が熟しておらず困難であるため、概要について触れておく。

両遺跡の遺構の時期は、7世紀初頭から9世紀末まで継続する。遺物の中には6世紀代のものも見られるが、集落としては7世紀に展開し始めたものと捉えたい。そして10世紀代にはこの区域から衰退していく。遺構の密度は、中原に関しては南部、芝宮に関しては北部に集中域がある。つまり、両遺跡とも田切りの谷に面している方に遺構が集中していることになる。

その田切りの形成された時期であるが、中原・芝宮の両方の遺跡で田切りの崩壊によって削ぎ落とされた竪穴住居跡（7世紀から9世紀）が検出されていることから、有史以前から現在の形を留めているのではなく、平安時代前期頃までは現在の幅より狭かったことが窺える。また、芝宮を横断する大溝の下層に、流水の痕跡が認められることから類推して、「現大溝が旧田切りではなかったか？」の想定ができるが、現段階ではまだ想像の域を出ない。

芝宮の大溝（SD03）からはテンバコにして300箱以上の土器が出土したが、その遺物の中には大型の甕の比率が一般の竪穴住居跡より多く見られ、接合作業の結果、60m以上離れた地点の遺物が接合した。それは7世紀後半の胴張りの甕であるが、離れた地点の個体接合はその他にも何例か確認できた。また、底部穿孔の甕や横瓶も出土している。そのことが何を意味する



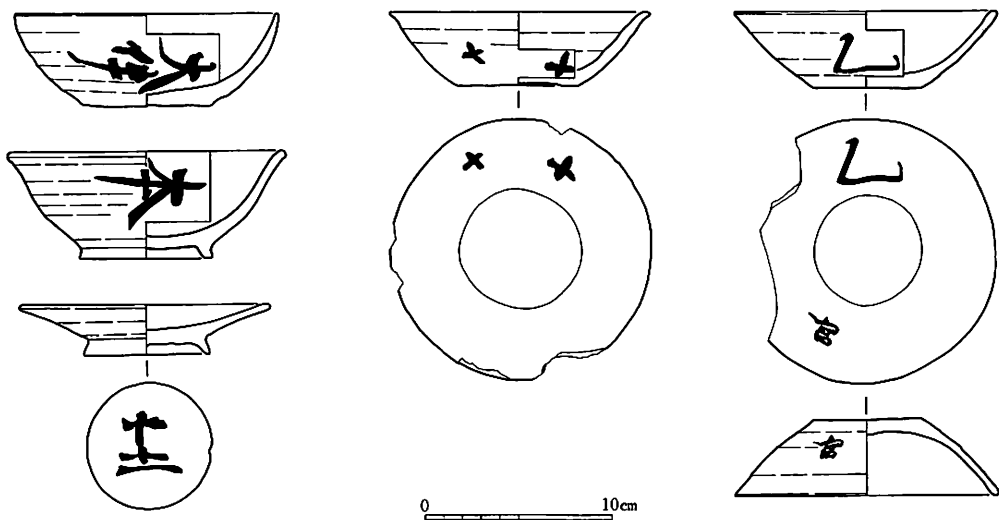
第5図 SB02出土土器

のか、溝と人の関わりを考えるうえで興味深い資料が得られた。

中原・芝宮の両遺跡とも遺構の空白・希少域がある。中原では北部に、芝宮では中央部に遺構の密度が極端に低い区域がある。それらの区域には竪穴住居跡が見られず、中原では掘立柱建物跡が数棟、芝宮では土坑墓と考えられる掘り込みが確認されている。それが何を物語るのか、単に別集団を想定するだけでなく、周辺遺跡の実態とも絡めて考えたい。今後の検討課題の一つである。

遺物に関しては、中原の7世紀後半の住居跡(SB302)から南伊勢系の可能性のある土師器の甕が確認された。従来より佐久地方の遺跡では関西方面のハケ甕として客体的に存在することが知られていたが、破片で出土することが多く破片になってしまうとその特徴である口縁部の摘み上げ・底部の調整過程がつかめず、胎土の違いから西方に起源を求めるに留まっていた土器である。今回の調査で口縁部から底部までの良好な資料が出土したため、三重県埋蔵文化財センター・斎宮歴史博物館の大川勝宏・上村安生氏に実見していただいたところ、南伊勢地方のものに間違いがないとの所見を得た。その特徴は、在地の他の土器の胎土よりかなり白みをおび、内外面ハケ調整で器肉は薄く、口縁部を内側に摘み上げ丸底を呈するものである。現在胎土分析中であり、遺構の時期決定も不十分であるので、在地の土器の年代観を明確にしたうえで更なる検討を試みたい。

芝宮・中原の8・9世紀代の遺構からは「大伴」「十二」「方」「田」「佐」等と記された墨書土器が数十点出土している。



第6図 中原遺跡群出土墨書土器

担 当 者：川崎 保

上信越自動車道建設に伴い発掘調査を実施した東部町の遺跡群はいずれも千曲川右岸の烏帽子岳南麓の複合扇状地上に立地している。平成4年から7年まで発掘調査を実施し、平成8年から報告書刊行に向けて整理作業を行なっている。本年は土器の復元、土器、石器など遺物の拓本や実測、写真撮影、また遺構図や遺物実測図のレイアウト、石器石材の鑑定などを行なった。遺物や遺構の概略はすでに過去の年報において、明らかにしてきたので、ここでは特筆すべき遺物、成果、具体的な整理作業内容について触れてみたい。

遺 物：従来から上信越道建設に伴う発掘調査で、遺構から縄文時代前期から後期にかけての資料が少なからず存在することが知られている。ここでは既報告では言及されていない時期の資料を紹介する。

草創期から早期初頭の土器（第7図-1～3）

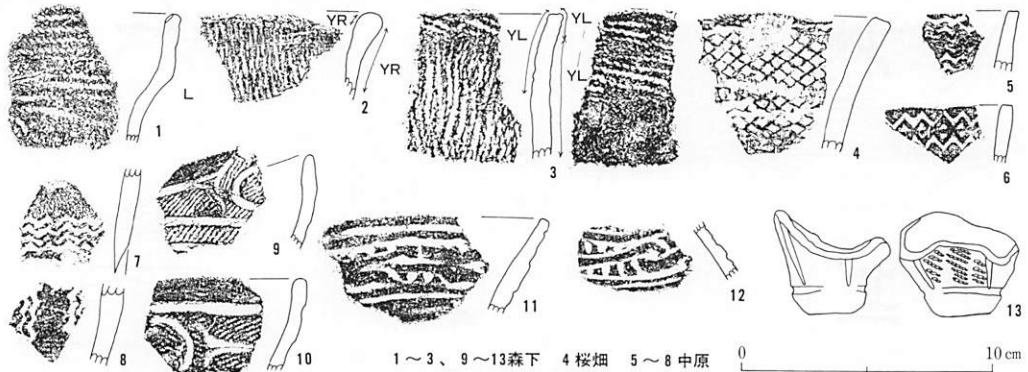
草創期に関連する資料としては中田遺跡の有舌尖頭器などがあり、当該期まで遡る可能性が考えられたが、これらの石器は土器を伴っておらず詳細な所属時期は不明である。1の土器は口縁に並行した多段構成の押圧縄文で、草創期末と思われる。2・3は早期初頭と考えられる資料である。2は口縁端部内面に横位に、外面は縦位に撚糸文を施す。3は口縁部内面と外面にはそれぞれ横位の撚糸文を施し、胴部には縦位の撚糸文を施す。いずれも森下遺跡出土。

押型文土器（第7図-4～8）

4は横位密接施文の格子目の押型文土器(櫻畑遺跡)。5～8は山形文などの帯状施文の押型文土器(中原遺跡群)。いずれも「細久保式」以前のものだろう。

晩期前半の土器・土製品（第7図-9～13）

晩期前半の土器。東部町では晩期の遺跡自体が極めて少なく、水Ⅰ式ないしその直後の土器が多少散見されていたにすぎない。森下遺跡からは晩期前半の土器ないしはそれに伴うと思われる土偶などの土製品が出土している。



第7図 縄文時代草創期、早期、晩期の土器、土偶

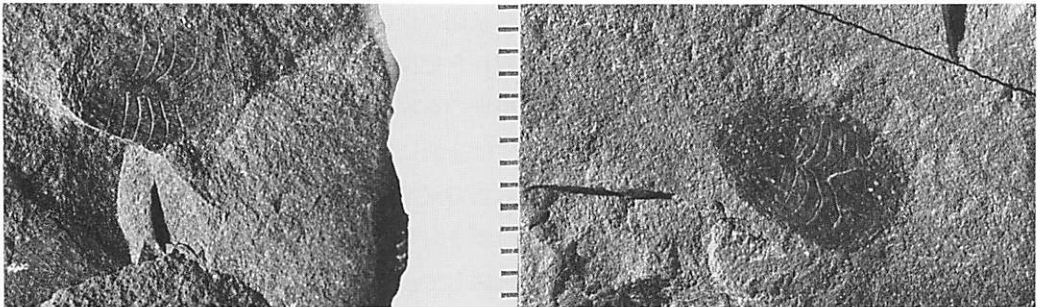
石器石材：千曲川流域の地質学的な分析に基づいた石器石材の動態を山岸猪久馬氏の指導の下に進めてきたがいくつか知見が得られた。

打製石斧 多くは先第三系の千枚岩質粘板岩製のものが目立つが、わずかに第三系の別所層の頁岩も見られた(第8・9図)(図は別所層の頁岩に多く含まれる魚類の鱗の破片。第8図は山越遺跡出土の打製石斧、第9図は上田市伊勢山の別所層より採集した黑色頁岩)。

磨製石斧 まだ多くの磨製石斧の石材鑑定が進んでいないが、第10図の真行寺遺跡出土の磨製石斧はEPMAを用いた分析結果(第11図)並びに肉眼の観察から、透閃石であると考えられる(新潟県糸魚川市立フォッサマグナミュージアム宮島宏氏ご教示)。

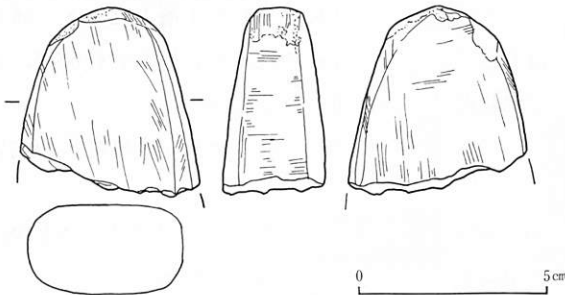
土器の復元：土器は、エポキシ樹脂系のプラセメントを使用。またこれらの型取りには「形状記憶樹脂」(クラプレン)以外にも、ギプスの芯材を用いている(第12図)(北上市立埋文センター稲野裕介氏、秋田県立埋文センター船木義勝氏ご教示)。

土器の実測：遺物型取器(針マコ)を特注し、遺物実測の効率化を進めた(第13図)。

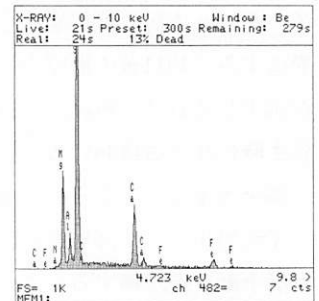


第8図 山越遺跡出土打製石斧拡大写真(×3)

第9図 別所層黑色頁岩(×3)



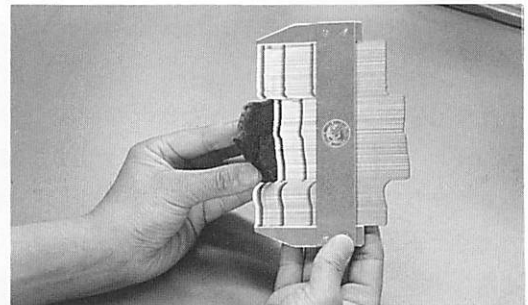
第10図 真行寺遺跡出土磨製石斧実測図(1/2)



第11図 EPMAチャート図



第12図 土器復元状況



第13図 土器実測状況

5 屋代遺跡群・更埴条里遺跡(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書24～26 整理作業)

担当者：寺内隆夫、鳥羽英継、平出潤一郎、水沢教子、宮島義和

両遺跡は善光寺平南部に位置し、千曲川右岸の旧河道・自然堤防上・後背湿地にわたる。この間を南北に縦断する形で全長2.3kmをほぼ全掘した。調査期間は平成3年から6年である。整理作業は平成7年度から開始し、同年度に『長野県屋代遺跡群出土木簡』を刊行している。

本年度『弥生・古墳時代編』の刊行、および『古代編』『縄文編』作成のための整理作業を中心に進めてきた。担当者の分担は①鉄製品・鍛冶関係資料、植物種実の選別ほかを平出、②弥生時代後期から中世の土器整理を鳥羽、③木製品および祭祀遺物と出土遺構の整理を宮島、④古墳時代集落および縄文土器・遺構の整理を水沢、⑤その他の整理、『弥生・古墳編』の編集、整理作業全般を寺内が担当し、『弥生・古墳編』の原稿執筆には全員が係わった。

地形・地質環境の大枠：時代と地域が多岐にわたる遺跡群の全体像を捉えるにあたり、市川桂子（長野調査事務所）を中心に地形区分と総合柱状図の作成を行った。これにより、屋代・更埴地区の氾濫原の環境変遷と人との関わり方の流れを把握し、その中で、各分冊（各時代）の位置づけを明確にすることを目指した。今後、整理の過程で若干の改訂を行い『総論編』でまとめる予定である。ただし、下記の大枠については全冊に踏襲される。

氾濫原の地形区分は大きく2群に分け、南から後背湿地Ⅰ群（更埴条里遺跡）・自然堤防Ⅰ群（屋代遺跡群）、自然堤防Ⅱ群（窪河原遺跡）が調査対象地となっている。地質区分は発掘成果に日本道路公団の行ったボーリングデータを加味して、下層から七ツ石層・反町層・屋代層に大区分した。現段階では年代測定データがないため、七ツ石層・反町層の形成時期は確定していない。上層の屋代層はその大半がシルト～粘土質の堆積物からなり下層とは大きく層相を異にする。約11mの層厚を測る屋代遺跡群⑥区では地表下6mの地点から縄文時代前期の土器が出土しており、単純に考えるならば完新世以降の堆積の可能性が高い。

弥生時代から古墳時代の土地利用変遷：ここでは、本年度刊行した『弥生・古墳編』の成果の一端を示すこととする。

屋代層中で、下部層最後の砂堆積（Ⅶ層）が終わった後、上位にシルトを中心としたⅥ層（中部層下部）が堆積する。この層が弥生～古墳時代の遺構・遺物包含層である。

弥生時代前期並行期には、後背湿地側（更埴条里遺跡）に大きく蛇行する自然流路が見られ、自然堤防上（屋代遺跡群）にはケヤキ・カツラの低地林が確認された。明確な集落や生産遺跡はなく、屋代遺跡群③区に、土器・石器の集中する居留地遺跡が見つかり、他の地区では打製石斧や石鏃が散在するといった状況である。弥生時代中期初頭には、更埴条里遺跡の自然流路S D881から土器蓋と石庖丁が出土しており、稲作が行われていた傍証となっている。

弥生時代中期後半（粟林式期）かそれに若干先行する時期は、本格的な水田開発にさらされる時期にあたる。低湿地側の自然流路（更埴条里遺跡中心）の多くは、この時期以降直線的な流路（水路）へと改修が進む。一方、自然堤防側（屋代遺跡群）では、低地林が生い茂っていた地区に新たな水路が掘削される。これらの新設水路は自然堤防最高部縁辺の基幹水路から分

水され、自然堤防の広い範囲に配水されていたと推定される。

弥生時代後期から古墳時代前期には、前段階の水路のほとんどが継承されず、VI層の黒色化が進む時期にあたる。このことは、水田開発が低調であったことを示しており、環境の変化とともに、森將軍塚古墳築造の契機や生産基盤を考える上でも大きな問題提起となるであろう。

古墳時代前期（4世紀後半）から中期にかけて、再び自然堤防全域に水路網が掘削され直す。この時期の基幹水路の多くは、若干の位置のズレはあるものの古代から現代まで継承される。また、後背湿地側でも、それまでに自然流路改修型の水路がなかった地区に新たな水路が掘削される。この水路網とともに、屋代遺跡群では5世紀代の水田が広範囲で見つかっている。

集落は自然堤防の高所に弥生時代中期以降連続と続いている。上信越自動車道の調査範囲では、弥生時代後期から古墳時代の全時期を通じて住居跡が確認された。特に古墳時代中期には住居の大型化とともに、集落内の礫敷遺構や北側河川斜面の木樋を伴う導水施設など、祭祀施設が充実していく状況が捉えられた。

地質時代	層序	模式柱状図	層厚(m)	岩相	考古時代	遺構・遺物	
第四紀	完 新 世	上 部 層	I	0.1~0.4 0~0.3 (~3.1)	灰褐色、砂質シルト層	現代	
			II	0.1~0.5 (~1.6)	1は黒褐色、2はにぶい黄褐色~灰黄褐色~灰褐色、細粒砂層	平安~中世	水田・畠・集落
			III	0.05~0.6 (~2.7)	IVは黒褐色~暗褐色~褐色、粘土質シルト Vは灰黄褐色~オリーブ黒色、シルト混じり粘土層	飛鳥~平安	水田・畠・集落
	新 世	中 部 層	IV	0.04~0.3	黒褐色、粘土質シルト層	弥生~古墳	水田・集落
			V	0.1~1.2	にぶい黄褐色~褐色、砂質シルト層	縄文晩期後葉	焼土跡・土器・石器
			VI	0.1~0.3	黒褐色~暗褐色シルト層	縄文晩期中葉	集落
			VII	0.8~1.1	にぶい黄褐色~黄褐色、シルト層、砂層を挟む	縄文後期後半	焼土跡・土器・石器
			VIII	0.2~0.5	にぶい黄褐色~暗褐色、シルト層	縄文後期前半	焼土跡・土器・石器
			IX	0.2~0.5	にぶい黄褐色~暗褐色、シルト~細粒砂層		焼土跡・土器・石器
			X	0.3~0.6	1にぶい黄褐色、シルト層 2黒褐色、シルト層 3にぶい黄褐色、シルト層	縄文後期前半 縄文中期後葉	焼土跡・土器・石器 集落
			XI	0.5~0.8	暗褐色、シルト層 1灰褐色~にぶい黄褐色、シルト層 2灰黄褐色~暗オリーブ褐色、シルト層 3暗灰黄褐色、シルト層	縄文中期中葉	焼土跡・土器・石器 焼土跡・土器・石器 集落
			XII	0.7~0.9	1オリーブ黒色、シルト層、砂層を挟む 2にぶい黄褐色~暗灰黄褐色、シルト層 3にぶい黄褐色、シルト層	縄文中期前葉	集落 焼土跡・土器・石器 焼土跡・土器・石器
			XIII	0.2~0.5	暗オリーブ褐色~灰色、シルト層		焼土跡・土器・石器
	世 層	下 部 層	XIV	0.6	黒~灰色、シルト層	縄文前期後葉	焼土跡・土器・石器
			XV	0.6	黒~灰色、シルト層、しまりよい		
			XVI	0.9	オリーブ黒~灰色シルト層、しまりよい	?	大形礫1点
			XVII	0.4以上	オリーブ黒色、シルト層、しまりよい		
			XVIII	14.7 ~ 17.6	砂礫層 砂主体(BKS) 礫主体(BYS)		
			XIX	28.3以上	有機質粘土層		

第14図 更埴条里遺跡・屋代遺跡群・総合柱状図

6 金井城跡・砂原遺跡ほか(北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1・整理作業)

担当者：白田武正、宇賀神誠司

佐久地区の北陸新幹線関係発掘調査は、平成4年度から8年度にかけて実施し、軽井沢町内（県、県西南部）・御代田町内（池尻、小田井城南部台地）・佐久市内（唄坂・金井城跡、中金井、栗毛坂、下蟹沢、長土呂、常田居屋敷、前田）・浅科村内（砂原・中平田中島、土合）の計15遺跡（総面積約8万㎡）が対象となった。

平成7年度から着手した整理作業は、今年度が最終年度となり、金井城跡、砂原、中平・田中島の各遺跡を中心にトレース・版下作成作業を進めるとともに、全遺跡の原稿執筆を行い報告書を刊行した。また、記録・遺物類については取納作業を行い、県立歴史館へ移管した。

今年度前半の作業で重点的に取り組んだ内容は、金井城跡の検出遺構と出土焼物について、昭和63年から平成元年にかけて佐久市教育委員会が発掘調査した結果も含めて遺構遺物の検討を行い、城郭全体の構造分析を試みた点である。具体的に、遺構については主に竪穴建物跡の計測と属性の整理を行って類型化し、焼物については佐久市教育委員会調査分を一括借用し、数量的な計測を行って組成を明らかにした。分析の結果は報告書に譲るが、金井城跡の性格については既成の城郭概念で解釈するのは容易ではなかったものの、新たな視点で再評価を与えることができたと言える。

7 国分寺周辺遺跡群・弥勒堂遺跡ほか(北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2・整理作業)

担当者：柳澤 亮

今年度は、本報告書刊行に向けた原稿作成が作業の中心となった。前半期は図面トレース、写真撮影、焼き付けを中心に作業にあたり、後半期に入ると図面図版・写真図版の割り付けと原稿執筆、表作成といった作業を進めた。

詳細は本報告書に記載したが、以下に整理の結果、明らかになった点を記す。

国分寺周辺遺跡群では、重複した遺構の整理から弥生時代後期、古墳時代前期・中後期、奈良時代、平安時代に何回かの遺構の増減が認めれ、特に信濃国分寺建立時期の8世紀後半に一旦増加した住居数が、運営期に入る9世紀以降激減しているという動向が認められ、当調査地点も少なからず国分寺の影響を受けていたと考えられる。

風呂川古墳では、周溝に重積された土師器群の様相からすると、本墳の築造時期が古墳時代中期の5世紀中葉（第2四半期）に収まることが分かり、未だ未明な点が多い上小地方の該当期の好資料となるだろう。

また、弥勒堂遺跡では平安時代の鍛冶工房跡1軒の鍛冶関連遺物の化学分析から、この遺構で鍛錬を中心とした鍛冶業が営まれ、その鉄素材として別の製錬遺跡で製造された小形の鉄塊系遺物が搬入されていた可能性のあることが分かってきた。

8 更埴条里遺跡・屋代遺跡群ほか(北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3・整理作業)

担 当 者：澤谷昌英

更埴条里遺跡・屋代遺跡群は更埴市屋代に所在し、北陸新幹線建設とその関連事業に伴い平成5・6・8年度に発掘調査された。更埴条里遺跡は千曲川の後背湿地内の微高地上に、屋代遺跡群は千曲川が形成した自然堤防上の最も千曲川寄りと埋没した旧河道の低湿部に立地する。検出された遺構は、更埴条里遺跡では奈良時代～中世の集落跡と平安時代と思われる畠跡、屋代遺跡群では弥生～平安時代の集落跡と平安時代の水田跡がある。屋代遺跡群では集落と水田との明瞭な境界が2カ所で確認された。平成8年度までには土器の接合・復元と土器・石製品の実測作業を終了した。本年度は金属器の実測と平成8年度から継続の遺物の写真撮影をし、図版作成と原稿執筆を経て報告書の刊行、収納を行った。

報告書は従来シリーズに比べ時間と人間の制約を最も大きく受け、事実記載中心のものとなった。2遺跡とも集落景観の変遷、竪穴住居跡の規模・主軸方向と形態、古代の食膳具を中心とする出土遺物について、屋代遺跡群6区では「夫」を中心とする墨書土器と集落との関わりについて、簡単な考察を加えた他は基礎的な情報と資料公開につとめた。結果、竪穴住居跡については従来割愛されたような過半が調査範囲外に及ぶものや重複により僅かに切られ残ったもの等も可能な限り図化して掲載した。担当者の交代もあって主体的な調査担当者が整理に関われない事態も生じ、検討の不十分な点も多々あろうが詳細は報告書を参照されたい。

9 篠ノ井遺跡群・築地遺跡ほか(北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4・整理作業)

担 当 者：両角英敏、田中正治郎

昨年10月開業した北陸新幹線建設にともなう篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡・築地遺跡・於下遺跡・今里遺跡の調査は平成5年から7年にかけて行われ、平成8年からは引き続いて整理作業に2年が費やされた。その結果については本年度刊行の報告書を御覧いただきたいが、何分時間的に余裕がなく、事実記載中心の内容であることをお断りしなければならない。特に篠ノ井遺跡群では調査担当者がほとんど整理作業に関わらないまま作業を進行せざるを得なかったため、やや物足りない内容であるかもしれない。しかしながら限られた時間内で、発掘調査時点の所見を尊重しつつ、どのようにすれば基礎的なデータをより多く提供することができるか努力を続けたつもりである。以下に主な内容を掲げておくので是非一読いただきたい。

篠ノ井遺跡群 弥生後期集落、円形周溝墓群、古墳後期集落、古代集落。瓦塔。

石川条里遺跡 平安洪水砂に埋もれた水田

築地遺跡 9世紀後半～10世紀および中世の集落。山茶碗、かわらけ。

於下遺跡 中世居館、掘立柱建物跡。かわらけ、中世陶磁器。

今里遺跡 幕末の善光寺地震にともなう洪水後の復興遺構。近世陶磁器。

10 浅川扇状地遺跡群・三才遺跡(北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5・整理作業)

担当者：上田 真

今年度末の報告書刊行にむけて、昨年度に引き続き遺物の実測・写真撮影、今年度当初より遺物・遺構のトレース、6月より図版作成、9月より原稿執筆を進めた。その結果、10月末から12月にかけて全ての原稿を入れ終り、12月より校正を行っている。

『年報』13でも触れたが、各地点で集落の時期が異なるが継続的な集落はほとんどなく、集落が頻繁な移動を繰り返していたことが、整理を進めていくなかでより一層明らかになった。これは、浅川の旧河道の移動によるものと思われる。北長野駅付近のW11・12では埋甕4基を含む縄文時代中期～後期の土器・石器が多数出土しているが、扇状地上の堆積の速さを考えると出土位置が浅く、古墳時代の竪穴住居跡上層からの出土もあることから、周辺の建築工事に伴って掘り上がった可能性が高い。W9区では、墨書土器を多量に出土したSD31の25m以内に同時期の竪穴住居跡はなく、代わりに少量であるが墨書土器を出土したSD39が40mの幅において平行に走り、間にやや大型の掘立柱建物跡があり、官衙的な遺跡であることも考えられるが、何分10m幅の調査であり建物配置を明らかにできないことが惜まれる。

三才遺跡では掘立柱建物跡や畑跡のほかに多数の火葬骨墓が検出されている。

11 笹原上第1・第2遺跡(県営蓼科ダム関連整理作業)

担当者：宇賀神誠司・広瀬昭弘

昨年度の現地調査をうけ、今年度は報告書作成に向けた整理作業を実施した。内容は検出遺構の図面整理・2原因作成・トレース作業・図版組と、出土遺物の接合・実測・拓本等である。

検出された遺構は殆どが縄文時代の陥し穴土坑で、ここでは整理途中での所見として昨年の年報でも若干触れた、覆土の形成から見た土坑の構造について簡単に触れたい。

土坑の短軸断面は下部では垂直に近く、上部が開く形状をとるものが多い。覆土は上部の開く部分では黒色土や黒色土にローム粒子を含んだ混土層がレンズ状堆積を示し、自然埋没と考えられる。一方、土坑下部では、壁際にロームブロックを主体とした土層が壁に平行(断面では縦方向)に見られ、その間に上部と似た混土層の堆積が見られるものがある。このロームブロックを主体とした層について、今までは土坑上部の崩落に伴う土層と考えられてきている。しかし、今回の調査土坑の断面を見ると、土坑幅が数十センチと狭いにも関わらずこうした土層を示しているものがある。壁の崩落であれば下部も両側から交互に崩落したレンズ状堆積をすすると考えられるが、そういう状況ではない。そこで、このような土坑の壁にロームブロックを主体とした土層を意識的に張りつけ、土坑の幅をより狭めようとしたのではないかと考えた。但し、この仮説にもその証左・構築方法などいろいろな問題点もあり、それらは今回の検討課題である。

(2) 長野調査事務所

発掘調査の概要

発掘調査は2遺跡、国道403号線バイパス関連の更埴市屋代・大境遺跡、国営アルプスあづみの公園関連の大町市山の神遺跡である。屋代・大境遺跡は長野県土木部が事業主体者で、更埴市教育委員会と調査範囲を分割して実施した。山の神遺跡は7～8年度に試掘調査を行って範囲を確定したが、本年度はその一部の記録保存の発掘調査を実施した。

整理作業の概要

対象遺跡は長野・上信越自動車道関連の石川条里遺跡、松原遺跡、村東山手遺跡、小滝遺跡、北の脇遺跡、前山田遺跡、春山遺跡、春山B遺跡、川田条里遺跡、榎田遺跡、牛出遺跡、対面所遺跡、葦山遺跡、風呂屋遺跡、八号堤遺跡、大谷地遺跡、飛山遺跡、普光田遺跡、七ツ栗遺跡、日向林B遺跡、大平B遺跡、針ノ木遺跡、裏の山遺跡、東裏遺跡、貫ノ木遺跡、大久保南遺跡、上ノ原遺跡、西岡A遺跡、星光山荘遺跡、建設省関連の貫ノ木遺跡、西岡A遺跡である。このうち石川条里遺跡3分冊のうち残りの1冊、松原遺跡のうちの縄文時代分、牛出遺跡、対面所遺跡、葦山遺跡、風呂屋遺跡、八号堤遺跡、大谷地遺跡、飛山遺跡、建設省関連の貫ノ木遺跡、西岡A遺跡は遺跡の検討を終え報告書を刊行した。他の遺跡は次年度以降の報告書刊行にむけての整理作業を実施した。

1 山の神遺跡(国営アルプスあづみの公園関連)

所在地：大町市常盤

調査期間：平成9年8月28日～12月12日

遺跡の立地：乳川扇状地の扇頂付近～扇中部

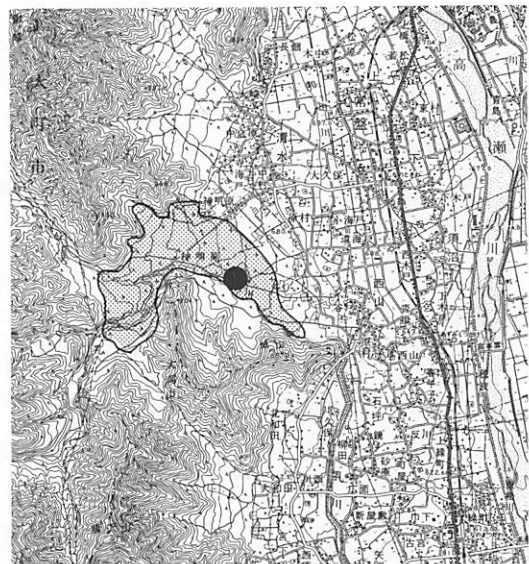
検出遺構：集石・集石塚など10基

出土遺物：縄文土器、石器（異形部分磨製石器、石鏃、特殊磨石、磨石、スクレイパーなど）

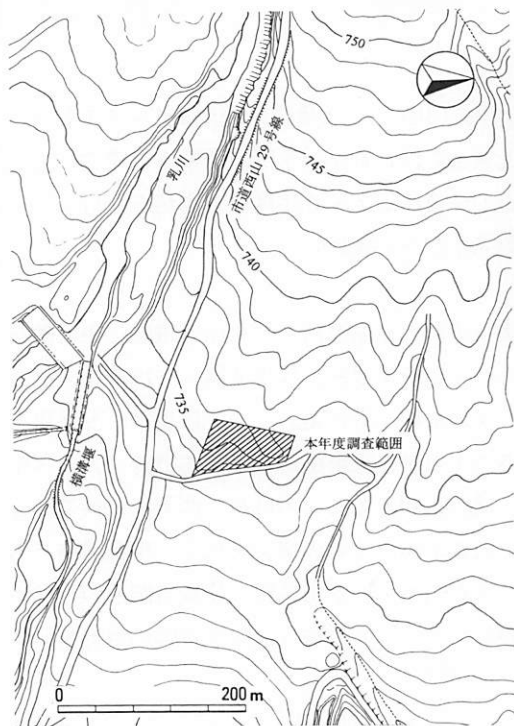
山の神遺跡は、北アルプスの餓鬼岳の麓に広がる乳川扇状地上に立地する。本年度の調査範囲はその扇中部付近に当たるが、小さな沢筋に開析の跡が複雑に入り組み、残された微高地に遺跡は営まれている。堆積状況も複雑だが、調査範囲の南端では、表土（I層）、黒褐色土（II層）、褐色土（III層）、黄褐色土（IV層）、白黄褐色土（V層）となる。遺物包含層はIII層とIV層で、厚さは調査区の南西端で約60cm、南東端で約20

調査担当者：石原州一、百瀬長秀、藤森俊彦

調査面積：800㎡



第15図 山の神遺跡位置図(1:100,000)



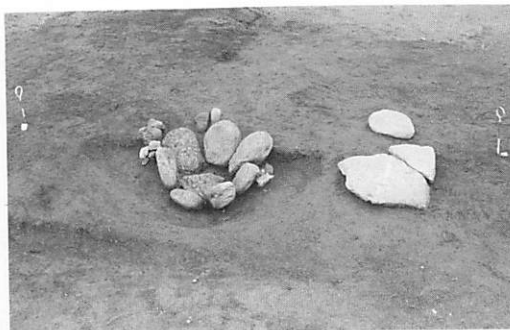
第16図 山の神遺跡調査区設定図(1:4,000)

cmである。

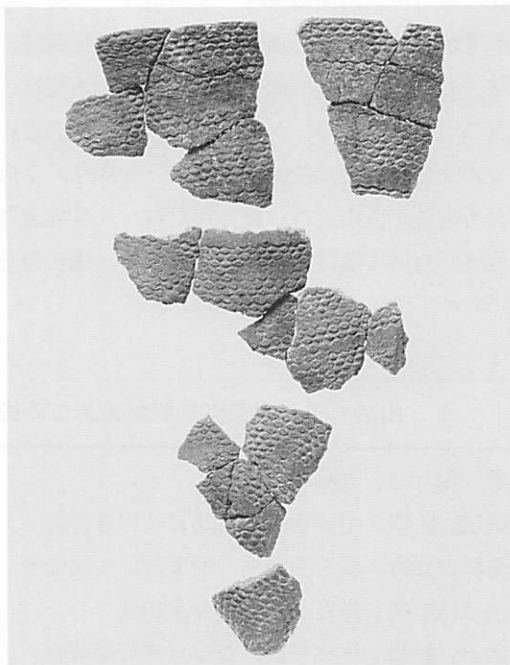
遺構は集石または集石炉を微高地の頂上よりやや下がった部分で10基ほど検出した。大小の礫を集めた集石が多いが、SH01(第17図)は底面に平石を敷き周囲に長径30cmから40cmの平石を並べ立てた構造をもつ。その内部には拳大の礫が多数投入されていた。遺物の集中する地点を中心に精査したが、ロームマウンドで攪乱され住居跡などは発見できなかった。

遺物は微高地に高密度に分布し、縄文時代早期の石器と土器を約5,500点検出した。主体は頁岩の剥片類で全体の約60%をしめる。ツールではスクレイパー(主に頁岩)、鋏形鏃(チャート・黒曜石・頁岩)、特殊磨石(花崗岩)、磨石(安山岩)、スタンプ形石器(花崗岩・蛇紋岩)、異形部分磨製石器(通称トロトロ石器=チャート)などがある。トロトロ石器4点は大・中・小と大きさにバラエティがある。コア(石核)の出土も多い。

土器は押型文土器を中心に沈線文土器、撚糸文土器、無文土器、縄文土器などが混じる。押型文土器は楕円文を中心に、山形文、格子目文などが見られる。また山形文の中には少量ながら胎土に黒鉛を含むものが見られる。破片資料のために器面全体の文様を把握できないが、施文方向は縦位・横位ともに見られ、異方向帯状施文も混じる。密接施文・帯状施文ともに観察され、帯状施文の無文部に刺突文を加えたり異種文様並列構成も見られ、種類は豊富である。



第17図 山の神遺跡SH01



第18図 山の神遺跡出土押型文土器

2 屋代遺跡群大境遺跡(国道403号線バイパス関連)

所在地：更埴市雨宮～屋代大境

調査担当者：西山克己、増村香子

調査期間：平成9年4月14日～12月19日

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防上

調査面積：約10,000m²

時期：縄文時代後期、弥生時代中期、古墳時代中～後期、古代、中世

検出遺構：

出土遺物：縄文後期土器、弥生中期土器、古墳時代土器、古代土器、中世焼物、弥生中期石器、中世石製品、中世木製品、金属製品、玉類、他

遺構 時期	住居跡	土壙	溝	掘建柱	畑
縄文後期		1			
弥生中期					
古墳中後期	90	1,308	84	2	
古代					4
中世					

平成3年度から4年間発掘調査された上信越自動車道関連の屋代遺跡群に隣接する。縄文時代前期か古代にかけての大集落や、屋代木簡に関連する初期国府、あるいは屋代郡衙に関わる遺構の存在が予想された。しかし、縄文時代関係では後期の土壙1基とそれに伴う土器が検出されただけであった。弥生時代中期では、点々と竪穴住居跡や溝跡等の遺構が検出された。古墳時代中～後期では、当期の集落の西端をおさえることができた。古代においては、カマドの構築に板石を多用した竪穴住居跡や洪水砂で埋没した大溝等が検出されたものの、国府や郡衙に関わる遺構の存在は確認しえなかった。今回注目すべき遺構として、中世の館を巡る堀跡と、その館に関連する諸遺構があり、共伴する木製品や石製品も興味あるところである。



第19図 屋代遺跡群位置図(1:100,000)



第20図 古墳時代中～後期の竪穴住居跡



第21図 平安時代の石を芯材とするカマド跡

3 松原遺跡(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4・5・6 整理作業)

担 当 者：上田典男 青木一男 市川桂子 町田勝則 西嶋洋子

1 本年度の整理作業

①上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4

縄文時代の調査結果を報告する本書は、今年度が刊行年度にあたり、トレース・製版作業・原稿執筆等を中心に作業を進めた。平成10年3月に刊行予定である。

②上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5

弥生時代及び古墳時代前期の調査成果を報告する本書の整理作業は、弥生時代中期栗林様式とそれ以後を分けて作業を進め、前者については、遺構図の基礎的整理作業、景観復原のための基礎作業、石器の選別、2510個体に及ぶ土器実測作業を終了した。そうした成果の中から、土器について、その一端を中間報告として提示する。弥生時代後期・古墳時代前期については、作業の進行状況が早く、報告書印刷に向けてのトレース・製版作業・写真図版の作成などに入っている。なお、資料数が膨大なことから、時期別、遺構・遺物に分冊して報告する予定である。

③上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6

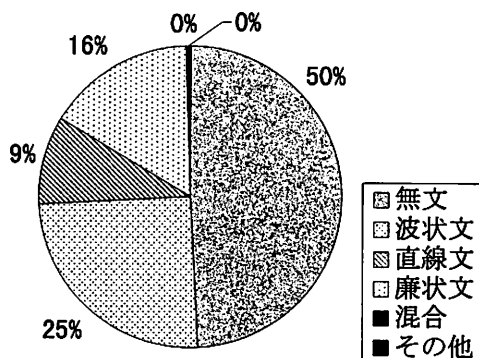
古代・中世及び古墳時代後期の調査結果を報告する本書の整理作業は、住居址出土土器の接合・計測・実測作業を中心に進め、一部、写真図版作成のための基礎整理を開始した。

2 中間報告

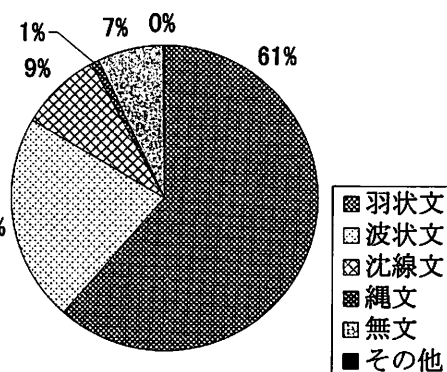
松原遺跡の弥生中期集落は、いくつかの囲郭溝で取り囲まれた環濠集落である。ここでは、最も長い時間開口していたと想定される囲郭溝、SD12出土土器群の一部について提示する(第23図1～26)。その主体となる土器群は「長野県埋蔵文化財センター紀要」5(1996年)で報告した様相2の土器群である。出土土器5～10の系譜、13～15・27の時間的位置づけ等課題は多い。

出土土器の文様帯に関する分析も進めている。甕の頸部・体部文様帯について、1139個体の登録土器について集計したのが下記の円グラフである(様相1～様相3の総計)。

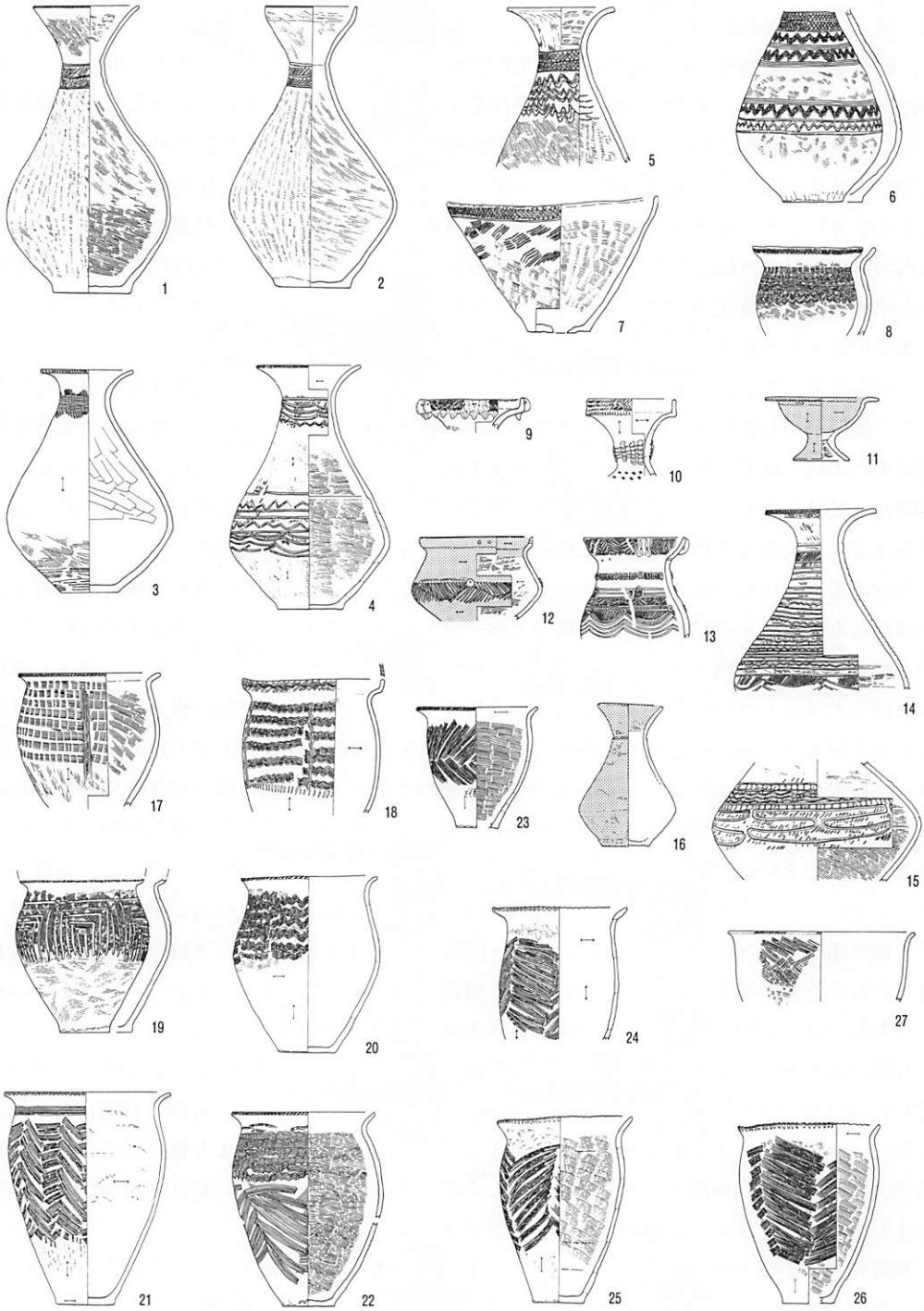
頸部文様帯の割合



体部文様帯の割合



第22図 松原遺跡弥生中期甕の文様構成



第23図 松原遺跡 S D I2 (環濠) 出土土器群 (1 : 8)

4 村東山手遺跡(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 8・整理作業)

担当者：鶴田典昭 石原州一

1. 経過と本年度の作業 本遺跡は長野市松代町大字大室字村東山手に所在し、平成1・2年度に発掘調査を行い、平成9年度より整理作業を開始した。また、本遺跡には大室古墳群が重なって分布しており、明治大学考古学研究室の協力で、調査地区内の第21号墳～第25号墳・第2号墳の6基を調査した。これらの調査成果は、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3大室古墳群』として報告書がすでに刊行されている。現在整理作業中の村東山手遺跡は調査地区内の古墳以外の遺構遺物に関するものであるが、古墳内に混入した縄文時代の遺物と古墳外から出土した古墳時代の遺物も整理対象としている。平成10年度に刊行予定である。

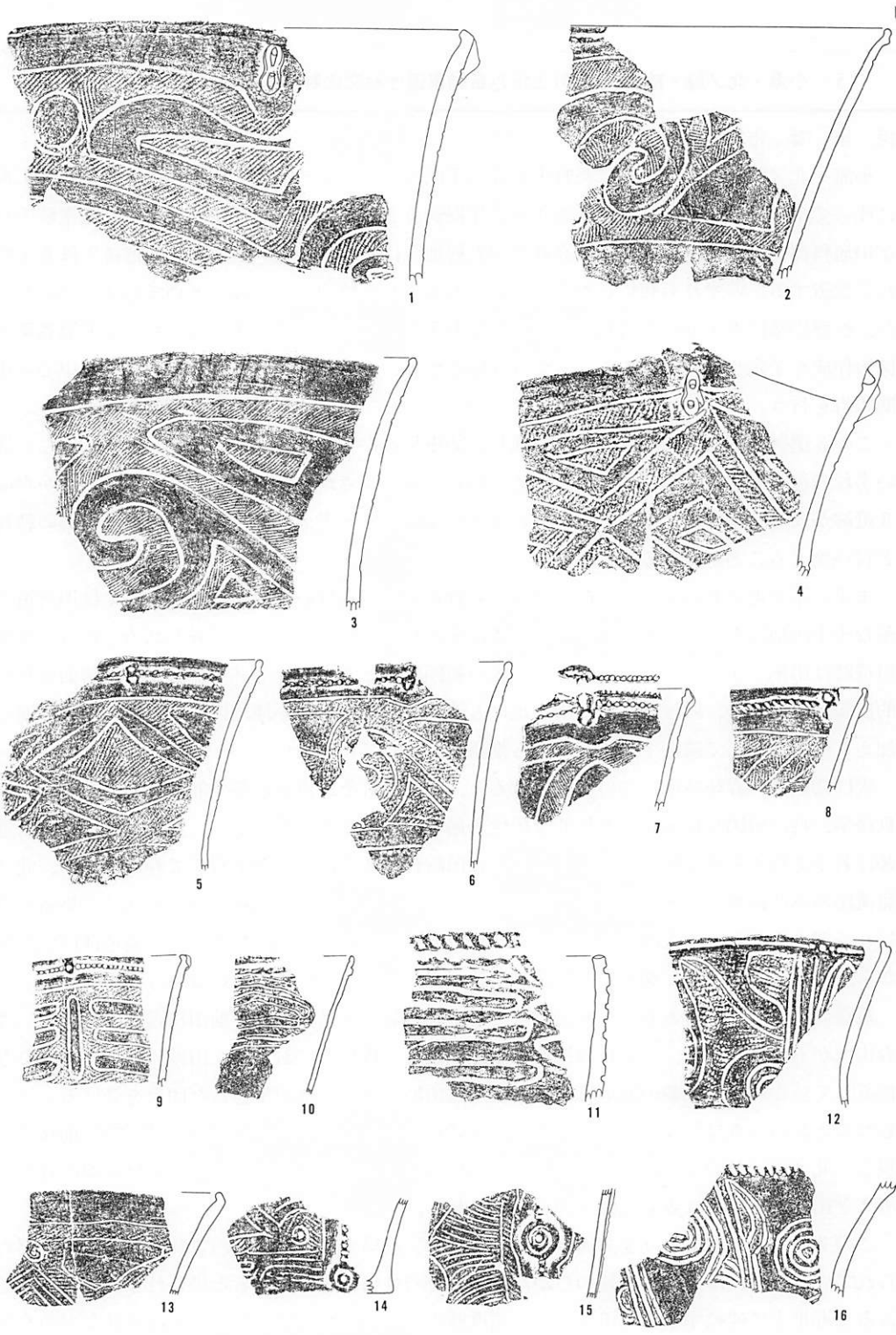
本年度は土器の接合、遺物の資料化、遺構図版のトレースなどを行った。

2. 中間報告 本遺跡は縄文時代中期末葉と後期前半の敷石住居からなる集落跡が中心となる。また、同時期の石棺墓・土坑墓など多数の土坑が確認されている。これらの他に、縄文時代早期後半の土坑、鉄剣とガラス玉を出土した弥生時代後期の土坑墓、平安時代の竪穴住居址、奈良時代の墳墓などが確認されている。現在整理作業途中であるが、縄文時代早期鶴ヶ島台式土器がほぼ完形に復元されるなど、長野県内では希少な資料も得られている。

今回は遺跡の中心を成す縄文時代後期の資料を紹介したい。12棟確認された敷石住居のうち10棟は後期前半のものであり、本遺跡の主体を成す。土器は堀之内2式に並行する時期のものが主体を占め、堀之内1式、加曾利B1式の時期のものが少数見られる。これらに伴うと思われる無文の深鉢も多数見られる。第24図は破片資料のみであるが、完形に復元される土器も少なからず見られ、現在接合復元を進めている。1～8は遺跡全体に多く見られる紋様である。9～16は前者に比べ出土量が少なく、やや古い様相を示す。13～15は同一個体と思われ、本遺跡では異質なモチーフである。また、北陸北半地域の南三十稲場式土器(第24図16)が認められるものの、その前段階と考えられている刺突文を特徴とする三十稲場式は今のところ確認されていない。1・2・4・7はSB08、6・10・13・15はSB09、3・9・12はSB10、5はSB13、その他は遺構外より出土した。なお、SB08～SB10は遺物出土量も多く、各器種のセット関係も捉えられる好資料であると思われる。今後、遺跡全体を見通した検討を進めていく予定である。土製品では土偶11点、ミニチュア土器5点が確認されている。

石器は約1200点余り出土した。定形的な器種では石鏃302点、石錐38点、石匙10点、打製石斧224点、磨製石斧69点、石錘38点、磨石・凹85点、敲石77点、石皿7点、石棒・石剣14点を確認した。これらの他に不定形な石器が多数出土している。土器の出土量より推定してこれらの石器の大半は縄文時代中期末から後期前半のものであるが、早期前半から前期初頭の土器も多少出土しており、これらの時期の石器も含まれている。

整理作業途中のため、土器全体量の半分にあたる遺構外の遺物は手がついていない状態である。今後の作業の中で新たな発見に期待したい。



第24図 村東山手遺跡出土土器 (1 : 4)

担 当 者：市川隆之

小滝・北ノ脇・前山田遺跡は長野市東部の千曲川右岸にあり、いずれも上信越道長野線工事に伴って平成元年～平成2年、平成4年に発掘調査された。この3遺跡のなかで小滝遺跡のみが旧埴科郡内松代地区にあり、旧高井郡内若穂地区に所在する北ノ脇・前山田遺跡とは若干離れて位置する。いずれも類似した中世遺跡でもあるため整理・報告はまとめて行うことになった。整理作業は本年度から遺物整理を中心に着手し、来年度は報告書刊行へむけて原稿執筆・図版作成を予定している。ここでは整理途中ながら、いくつか判明してきている点を中心に中間報告を行う。

この3遺跡は①山際の小平坦地に立地し、②中世後半（特に戦国時代前後）を中心とし、③いずれの遺跡も背後の山には山城を控えているという3点が共通する。これらの共通点からは3遺跡が同じ時代背景によって出現したことを示唆すると考えられ、この共通点は遺跡の特長と言い換えることができる。

まず、①立地であるが、3遺跡はいずれも背後に山を背負い、前面に低地もしくは旧河道を望む小平坦地にある。ただし、各遺跡自体はその範囲や場所に若干の差異も認められる。前山田遺跡は山裾ラインが内湾する奥まった狭い範囲にまとまるが、北ノ脇遺跡では緩斜面が比較的広範囲に広がり、同様の地形は隣接地にも連続する。また、小滝遺跡は山際の緩斜面範囲に加えて低地を挟んで隣接する微高地にも集落が広がっている。

次に②遺跡の存続時期についてみると、いずれもそれ以前に部分的な利用があっても中世後半、特に戦国時代前後に本格的な居住が始まるようである。ただし、小滝遺跡・前山田遺跡は若干先行する可能性がある。そして、戦国時代に3遺跡がほぼ重複して存続するが、北ノ脇遺跡のみが近世へと連続しないで廃絶する。このことは北ノ脇遺跡のみが現代でも集落が隣接して認められない点と関連しよう。ただし、近世に前山田遺跡は観音寺、小滝遺跡は伝承ながら堂があったとされ、必ずしも集落が継続するかは明らかにできていない。

最後の③についてであるが、小滝遺跡背後には霞城、北ノ脇遺跡・前山田遺跡背後の山には春山城がある。しかし、いずれの遺跡も直接山城と一体化しておらず、山城の登城ルートにも位置していないため、麓の城下町というよりも山城周囲に村落が集合した印象を受ける。こうしたことから直接的な関連を求めることは難しいかもしれないが、遺跡が戦国時代前後に出現し、北ノ脇遺跡のように前後に継続性が認められない遺跡もあるなかで、遺跡立地の背景を考えと山城との関連は重要な鍵を握ると思われる。

この3遺跡は以上のような共通点ばかりでなく、遺構の種類と配置のされ方には差異も認められている。これは遺跡の存続のしかたや、遺跡の性格の違いによると思われる。遺構種類でみると近世まで連続する前山田遺跡と小滝遺跡の山際では石垣・石列・礎石建物跡などの石を使用した遺構が認められたが、北ノ脇遺跡及び小滝遺跡の旧河道より微高地では掘立柱建物跡が中心である。また、北ノ脇遺跡のように低地境に幅4m前後の溝で区切り、内部は道状遺構

を挟んでその両脇に類似した掘立柱建物跡が整然と配列するものもあれば、小滝遺跡のように規則性が把握しにくい遺跡もある。このような遺跡の差異は十分検討できていないが、遺跡の性格や遺跡に居住した人間の階層や契機の違いによっても考えられる。

以上の様相から、現時点では3遺跡は戦国時代の軍事的な緊張のなかで出現したのではないかと推測している。今後はこうした推測を踏まえながら、遺構配置や遺跡の継続性の差異の意味を含めて遺跡の内容を明らかにしていく作業が必要となるが、現時点ではさらに次のような課題が残されていると考えている。

遺跡の基本的な性格については存続時期と山城との関連が鍵を握ると思われる。そのため周辺集落の動向や遺構の種類や配置の比較をできる限り行う必要があると考えている。特に山城との関係については各山城の構造と形態の検討が必要となろう。また、千曲川右岸ではさまざまな武士がいたとされるものの、平地の方形居館が少なく不明瞭な点、16世紀中頃以後では当地域の政治的な中核となる松代城の出現との関係の問題も視野に入れられればと思う。さらに、こうした基本的な性格とは別に遺跡ごとの遺構の種類とその配置、出土遺物の種類や焼物組成などの差異も明確にする資料化を行いたいと考えている。

また、前山田遺跡は観音寺、小滝遺跡は伝承ながら堂があったとされるように近世へ連続する遺跡で、いずれも近世に仏教関連施設であった可能性がある。当地域周辺では山際に立地する戦国時代に創建された伝承をもつ寺がいくつかあるので、これらの寺院のあり方も含めて近世村落への展開と仏教関連施設が成立した経過を明らかにできればと考えている。

上記の問題はすべて報告書で解決しきれないかもしれないが、今後の整理指標としていきたいと考えている。



第25図 小滝遺跡



第26図 北の脇遺跡



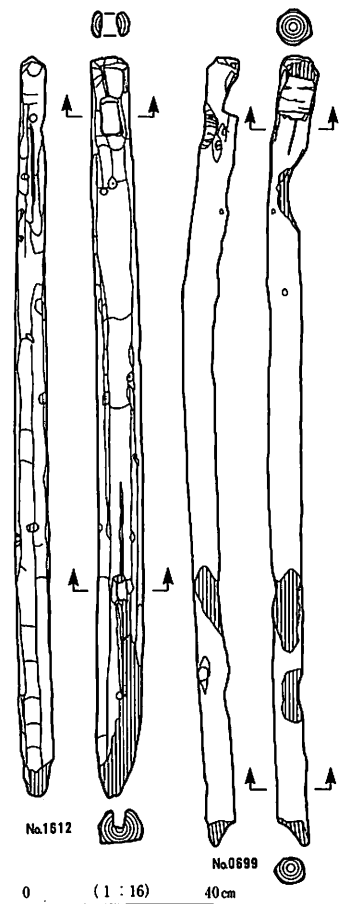
第27図 前山田遺跡

6 川田条里遺跡(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書10・整理作業)

担 当 者：鶴田典昭、伊藤友久

遺跡の概要と整理の状況：川田条里遺跡は、千曲川右岸の後背湿地に立地し、長野市若穂川田地籍に所在する。発掘調査は、1989～90年度に実施され、水田跡は弥生時代から江戸時代にかけての時期が対象となった。木製品の記録および保存処理は、1991～93年度にかけて行われ、本年度より再開した。本年度の整理作業にあたっては、未処理の木製品が7、8年間の水漬け状態による脆弱化などを考慮し、土器などを含めた遺物の記録作業を優先的に実施した。木製品は再洗浄し、資料化すべきものは実測を行った。実測は、鋏などの耕作具、田下駄などの補助具、武具あるいは祭具としての弓、曲げ物などの容器、装飾具としての櫛、そのほか建築部材などで、総数約160点に上る。全体的な把握は次年度までかかる見込み。土器は注記し台帳作成後、接合作業を行い、資料化する遺物量を把握した上で実測作業に入ったところである。尚、写真整理の補足作業は行えたが、遺構図関係の整理は来年度から作業を進めることになる。

中間報告：今年度の整理作業の過程では、ことに木製建築部材に新たな資料が加えられた。高床式建物の開口部に納まる楣材と蹴放材は合わせて9本の存在が認められ、他遺跡と比較してもその出土量は注目される。垂木材（川田No.0699、A3区出土他）は元口側に施された棟木材との仕口加工の形態が長野市石川条里遺跡（1997年度報告書刊行）や長野市榎田遺跡（現在整理作業中）のそれと極めて類似していることが判明した。垂木材の使用は屋根葺材にも係わり、屋根の形態にも踏み込める。また、ませ柱あるいはそれに付随すると思われる部材（川田No.1605、C区出土）や、小屋組内の母屋梁材（川田No.1612、B2区出土）は出土木製品としては初見である。ませ柱と思われる部材は、全長約100cmで両端が欠損しているためその全容はわからないが、近年の農家に見られた家畜小屋や部屋の出入口に簡易的に渡される横木を受ける部材で、その受け口の加工が3箇所に残されている。この材の出土により家畜を囲む施設の存在が裏付けられる。母屋梁材は一端部が欠損しておりその全容は明かではないが、全長約160cmを測り、一端部側に施された貫通する柄穴とそれより約100cm内側の柄穴により束柱と柱材の組合せが想定される材である。何れも出土層位の検討を踏まえ正確な時期決定が求められる。この他、頭貫仕口による軸組の構造や江戸時代一部の地域に見られた長い柄のコキ柱によるヒキモン構造など仕口加工による健全部材間の組合せ構法など、建築構造形式に踏み込める材料が揃いつつある。



第28図 川田条里遺跡出土木製品

7 春山B遺跡(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書11・整理作業)

担当者：白居直之

1. これまでの経過

春山B遺跡は、長野市若穂綿内田中地籍に所在する。遺跡は千曲川右岸の自然堤防及び後背湿地に立地し、後輩湿地となる南西側には広域な水田遺跡である川田条里遺跡と隣接している。発掘調査は平成2年度(18,200㎡)と平成4年度(7,400㎡)の2カ年実施され、縄文時代晩期の土坑群、弥生時代中期後半と後期前半の竪穴住居を主体とする集落、弥生時代後期後半の周溝墓を主体とする墓域、弥生から近世にわたる水田等が検出された。出土遺物は土器250箱、石器80箱、木器30箱であったが、弥生時代の竪穴住居からは鉄斧・銅釧・漆付着布・漆塗り木製片口鉢・建築部材など特殊品がいくつか出土した。

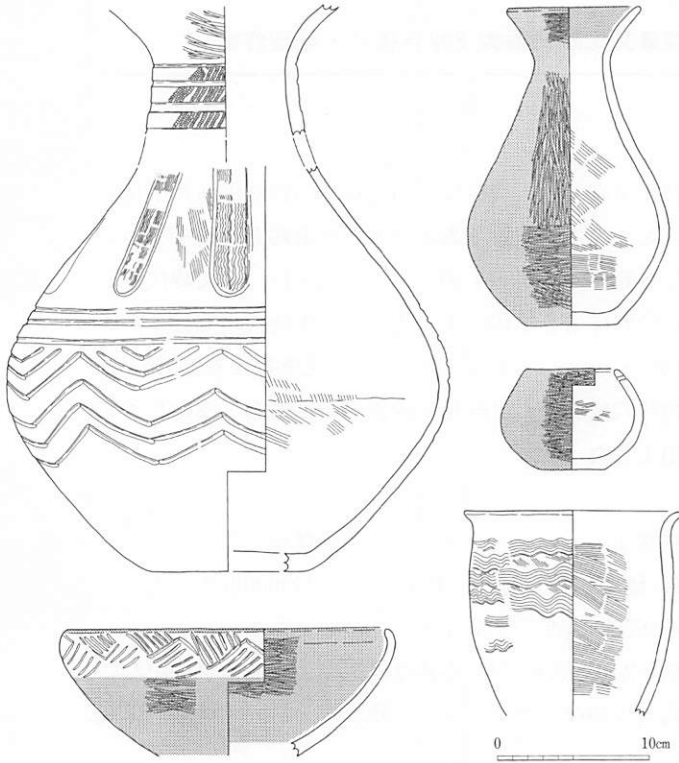
2. 本年度の整理作業

遺物に関しては出土帰属遺構の確認及び洗浄・ネーミングといった基礎整理をし、土器・石器の接合・復元に6カ月を費やした。土器は極めて脆く補強に手間取ったが約600個体の実測を行った。石器は約80m離れたSB08とSB36の竪穴住居の磨製石庖丁の破片が接合するなどの成果を上げ、各種磨製石器の製品・未製品等を含め約200個体、木器は住居出土の建築材を中心に約70個体を抽出し実測した。遺構では竪穴住居48軒、周溝墓17基の他土坑・溝の遺構図の確認、出土遺物の分布・接合状況の作図をした。

3. 弥生中期の特殊遺物について

弥生中期後半に帰属する遺構は竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡3棟、土坑4基である。この時期の竪穴住居からは県内では住居出土としては初例となる鉄斧、鉄石英を素材とする管玉の工房に関わる遺物が出土した。玉造に関しては鉄石英を素材とする未製品が12点出土していることが判明していたが、整理作業を進める中で玉造に関連した遺構としてのSB05・08・33の3竪穴住居があることが判明し、この3軒からは600gに及ぶ鉄石英の剥片・破片が出土していた。この3住居の他に管玉の未製品はSB13・19に見られ、筋砥石も遺跡内で2点見いだすことができた(第29図)。

鉄斧は焼失住居であるSB01より出土が確認されていたが、同一住居内から太形蛤刃石斧8点と扁平片刃石斧2点、置き砥石1点があり、これらの石器との共伴関係は注目される。同時期の鉄斧の県内出土遺跡は長野市光琳寺裏山遺跡と佐久市社宮司遺跡があり共伴した土器と玉類から葬送に関連する遺構に伴ったものと判断されるがいずれも出土状況が不明確であった。この2遺跡の遺棄と考えられる鉄斧と本遺跡の焼失居出土という偶発的な出土は、当該期における鉄の所有・流通を考える上で示唆的である。本遺跡の鉄斧は善光寺平における金属器の普遍化を明確にし、石器との併存はその用途が石斧と変わらないことを類推させる。また弥生後期に鉄剣・鉄釧・鉄鍬を多出する中部高地の鉄素材の流通は本時期から始まるといえる(第29図)。



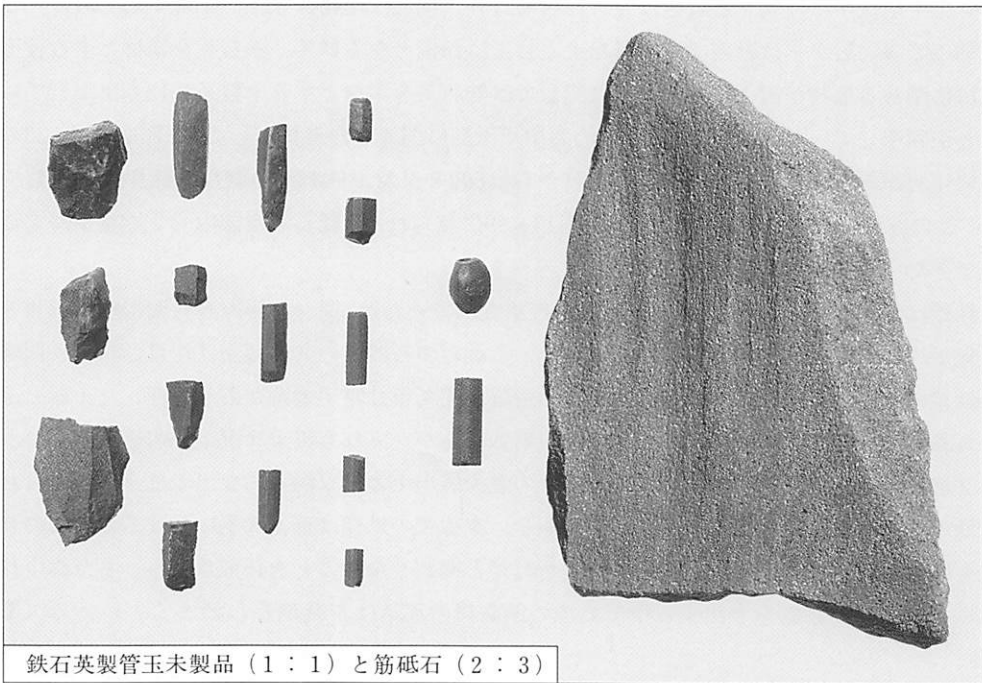
土器 (1 : 5)



鉄斧・偏平片刃の石斧 (1 : 3)



大形蛤刃石斧 (1 : 6)



鉄石英製管玉未製品 (1 : 1) と筋砥石 (2 : 3)

第29図 春山B遺跡SB01主要出土遺物

8 榎田遺跡(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12・整理作業)

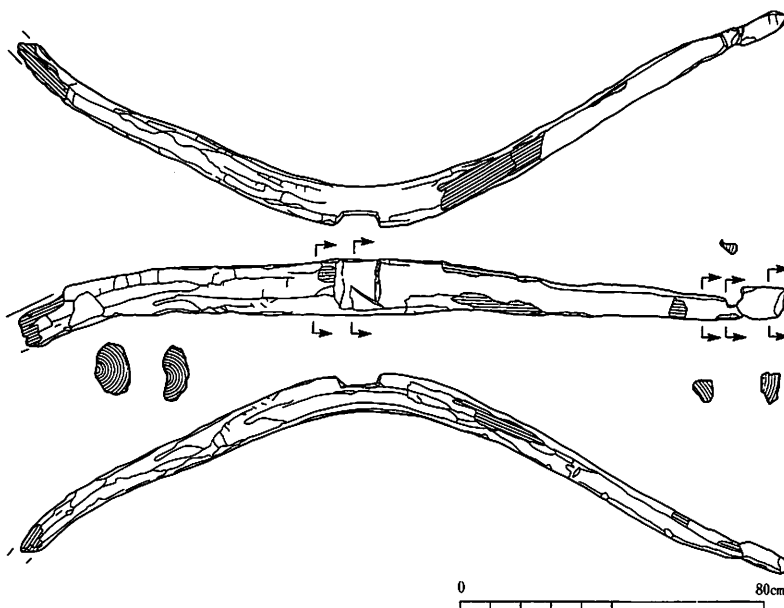
担当者：広田和穂 賛田明 山崎まゆみ

昨年までの作業状況：平成7年：土器接合及び補強復元、第3号沼出土木製品の整理、金属製品の保存処理。平成8年：土器実測、3号沼出土製品の実測とトレース及び図版組、同遺構出土建築部材の実測、トレース。金属製品、骨製品、玉製品の実測とトレース。石器類の接合・実測・トレース。遺構の属性分析、修正、2次原図作成。実測終了土器の復元、第3号沼出土木製品の写真撮影。

本年度の作業：遺構・遺物・写真図版の作成。遺構事実記載の作成。弥生時代中期の石器実測、トレース

中間報告：榎田遺跡の3号沼では古墳時代中期から後期に属すると思われる多くの建築部材が出土している。木製建築部材の整理は昨年度にて終了しているが、今回はその中から幾つかの所見について報告したい。3号沼では、高床式建物の開口部の内法に納まる門錠付の扉板材（榎田No.586）と全長約670cmの完形品の棟木（榎田No.2055）の出土が知られる。整理作業によりこの扉板材は、楣材と蹴放材により観音開きの片扉板と判明したが、軸吊棒側の反対木端面には3箇所の柄穴に埋木がなされ全国的にも特異な形態であることが明かとなった。また、棟木は断面蒲鉾形に削り取り、曲面部の表面を丁寧に仕上げ、垂木（榎田No.1356ほか）との組合せを想定していることがわかる。また、束柱などの接合材とは両端より約70cm内側に、柄穴を設けている。この柄穴が小屋組の束柱との仕口用加工であるならば、柄穴と柄穴の心々の距離523.2cmは桁行の建物規模として推測される値である。

この他、弓なりに大きく折れ曲がる榎田No.1805材は小屋組を形成する二重梁（小屋梁上の梁）として位置付けられ、長い柄を持つ柱材（榎田No.492ほか）は軸組の構成材として組み入れられるため、何れも当時の建築構造における一形態を裏付ける重要な建築部材といえる。



第30図 榎田遺跡出土木製品 (No.1805)

9 牛出遺跡・風呂屋遺跡ほか(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14・整理作業)

担 当 者：鶴田典昭 石原州一 中島英子

1. 経過と本年度の作業 平成6・7年度調査の中野市牛出遺跡、平成6年度調査の豊田村葎山遺跡・同風呂屋遺跡・同飛山遺跡・同大谷地遺跡・同八号堤遺跡、平成7年度調査の豊田村対面所遺跡の整理作業を行う。上記遺跡の整理作業は平成8年度より行っており、本年度は図版作成と原稿執筆、編集を行った。平成10年3月に報告書を刊行する。

2. 中間報告 上記の7遺跡の時期・性格はそれぞれ異なっており、旧石器時代から中世にわたる遺物・遺構が検出された。千曲川河畔の古墳時代と平安時代の集落(牛出遺跡)、五輪塔群が見られる中世墓址群(対面所遺跡)、古墳時代末期から奈良時代初頭の円墳(風呂屋古墳)の報告のほか、縄文時代中期前葉から中葉の深沢タイプの土器を出土した風呂屋遺跡での土器を中心とした論考、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて奥信濃の土器編年などを掲載している。

また、平安時代の土師器甕の胎土分析の結果、牛出遺跡と風呂屋遺跡の胎土がまったく異なっていることが判明した。器面調整の違いが胎土の違いにあらわれており、土師器甕の生産と消費を考える上で興味深い分析結果である。詳しくは本報告書を参照していただきたい。

10 日向林日遺跡・貫ノ木遺跡ほか(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15・16および野尻バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書・整理作業)

担 当 者：大竹憲昭 谷 和隆 中島英子 藤森俊彦

1. 経過と本年度の作業 上信越自動車道は平成5年度から平成7年度まで、野尻バイパスは平成6年度から平成8年度まで発掘調査がおこなわれ、旧石器時代の資料を中心に多大な成果をおさめた。整理作業は、発掘調査をおこなった各年度とも冬期に基礎的な整理をおこない、昨年度より報告書刊行に向けた通年の整理作業体制にはいった。

本年度は、旧石器時代と縄文時代以降の2体制にわけ、旧石器時代班は、昨年度からの器種判別を全遺跡終了させ、石器類の詳細観察記録と実測、個体判別および接合、写真撮影等をおこなった。縄文時代以降班は縄文土器の接合、実測・拓本を中心におこなった。

野尻バイパスの報告書作成をおこない、平成10年3月に刊行し、建設省関東地方建設局の委託業務はすべて完了した。

2. 中間報告

地形復元：信濃町野尻湖周辺は、北流して日本海に直接至る関川水系と、南流して千曲川に合流する鳥居川水系の分水嶺にあたり、丘陵と谷・低地・湖沼地が複雑に入り込んでいる。また、沖積世に堆積した黒色土は洪積世の地形を埋めており、旧石器時代の人々の活動した地形環境とは大きく異なっている。発掘時に各地層境の等高線地図を作成することは不可能であったため、一定の間隔で土層柱状記録をおこない、それをもとに各層の地形復元をおこなうことにした。

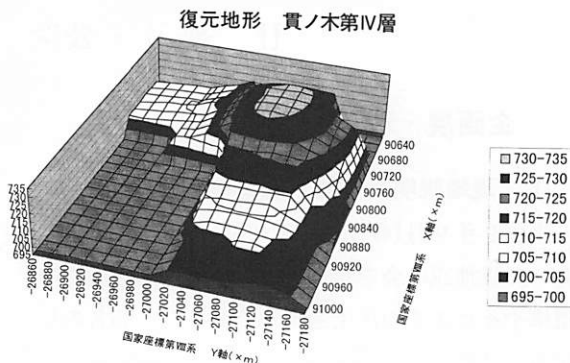
貫ノ木遺跡では、遺跡内に20m間隔でI層～VII層までの土層柱状ポイントを約200ヶ所設定

し、そのデータをコンピュータに入力し、図化できるようにした。第31図は貫ノ木遺跡第IV層上面の北西方向からの鳥瞰図である。コンピュータに入力してあるため、方向、角度は自由に設定できる。

器種組成：昨年度からの器種判別作業により信濃町内10遺跡の旧石器時代（一部縄文時代草創期を含む）器種組成が明らかになった（第1表）。明らかに縄文時代の石器と考えられるものは除いたが、敲

石・凹石・磨石・砥石・石核等は明瞭には分離できない。今後、分布等の検討を経て、帰属時期を確定していくので、点数の変更があるが、おおまかな傾向はみてとれる。

日向林B遺跡の組成は環状ブロック群だけを抽出しているが、台形様石器、斧形石器など他の遺跡と比べ群を抜いて多い。ただ台形様石器については、剥片の一部に微細な剝離痕が認められるものもカウントされている（いわゆるウワダイラ型台形石器も含む）。台形様石器の認定に再検討をうながす好資料となろう。貫ノ木遺跡は、台形様石器、ナイフ形石器、槍先形尖頭器といった上部旧石器時代を代表する各種の石器が出土しており、日向林B遺跡と同時期だけでなく各時期わたり使われていたことがよく分かる。



第31図 貫ノ木遺跡第IV層復元地形

器種	遺跡名	七ツ栗	日向林B	大平B	裏の山	東裏	大久保南	上ノ原	貫ノ木	西岡A	星光山荘	合計
ナイフ形石器		6		19	81	167	28	11	339	70		721
台形様石器			1,301		28	31	18	20	330	5		1,731
槍先形尖頭器					4	27	3	23	78	35	35	205
角錐状石器						4		4	2		2	12
斧形石器			81		3	20	33	7	62		55	261
捺錐					4	14		1	14	3	16	52
彫器		28			10	70		14	99	20		241
搔器		7	2	27	126	244	1	5	123	16	14	565
削器			32	17	166	232	3	24	436	147	63	1,120
楔形石器				2	45	16	13	16	249	11	4	356
石刃		90		1	22	266	1	7	197	29		613
細石					7			1	1			9
2次加工のある剥片		11	172	8	154	196	20	22	615	30	50	1,278
使用痕のある剥片		8	703	11	340	259	56	25	938	87	38	2,465
折断剥片			496		8	10	12	1	124	4		655
敲石			16	1	26	46	3	17	238	26	18	391
磨石			1	2	5	5	1	1	30	1	26	72
凹石					3	4	2		47			56
砥石			5		1	3	1		24	1	7	42
礫器		11			4	5			1			21
削片		7			2	10			67	4		90
剥片		77	2,835	383	3,835	4,872	813	1,609	20,602	1,796	498	37,320
砕片		19	3,009	208	2,434	428	117	470	7,675	745	383	15,488
石核		169	317	44	362	490	65	144	1,472	136	7	3,206
細石核					2		1	1	1			5
原石			3	1	10	7			75	2	13	111
有茎尖頭器					1	1			1	1	29	33
その他			5		4	1			18	2	2	32
合計		433	8,978	724	7,685	7,428	1,191	2,423	33,858	3,173	1,258	67,151

【註】・本表は整理中のため、帰属時期が確定できないものも含むため、今後数字は変更される。
 ・斧形石器・砥石など、破片も1点として数えているので実際の個体数は、これより少ない。たとえば日向林B遺跡の斧形石器の個体数は54本である。
 ・日向林B遺跡の組成は環状ブロック群からの出土数である。他に800点ほどの旧石器の遺物がある。

第1表 信濃町内旧石器時代遺跡器種組成表

II 普及・公開活動の概要

企画展・現地説明会等

(1) 現地説明会 [長野調査事務所]

平成9年9月14日(土)・16日(月)に、屋代遺跡群において現地説明会を実施した。古代の調査面での遺構やそれまでの出土遺物が公開され、85名の見学者が訪れた。

(2) 施設見学者への対応[長野調査事務所]

平成9年4月24日(木)・25日(金)、長野市立通明小学校6年生4クラスの142名が篠ノ井整理棟を訪れ、埋蔵文化財センターの仕事の概要説明を聞き、保存処理室、写真室などを見学した。古代の土器復元を体験してもらったが、各グループで協力して復元し、楽しそうであった。

平成9年7月29日(火)、広徳中学校2年生2名が地域の職場を体験する学習で、篠ノ井整理棟を訪れ、施設見学と土器復元を体験し、屋代遺跡群の発掘現場を見学した。

(3) 企画展・速報展

平成10年3月22日(土)から長野県立歴史館企画展示室において、平成9年度(財)長野県埋蔵文化財センター企画展「千曲川流域の古墳時代」を開催している。これまでに当センターが発掘調査を行った遺跡の写真パネルや古墳時代の遺物を展示し、古墳時代の人々の生活や権力者の姿が想像できるように企画した。また、平成9年度に発掘調査した遺跡の速報展もコーナーを設けて実施している。平成10年5月10日(日)まで開催予定である。



第32図 屋代遺跡群現地説明会

2 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会

当センターを開催法人として、平成9年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会を開催した。は、平成9年10月8日(水)～9日、長野市ホテルメトロポリタンを会場にして開催された。その概要は以下のとおりである。

- | | |
|------|-----------------------------|
| 1 日時 | 平成9年10月8日(水)13時～9日(木)13時30分 |
| 2 会場 | 長野市ホテルメトロポリタン |

3 内容

10月8日（第1日）

開会行事

開会あいさつ ㈫千葉県文化財センター 鈴木道之助常務理事
 開催法人あいさつ ㈫長野県埋蔵文化財センター 佐久間鉄四郎副理事長

講演

「古墳時代前期の様相－石川条里遺跡の時代」 愛知大学 加納俊介講師

分科会

管理運営部会

講演

「人間関係とストレス」 夏目外科医院院長 夏目隆一博士

調査研究部会

事例発表

「石川条里遺跡の調査概要」 ㈫長野県埋蔵文化財センター 市川隆之調査研究員
 「東北・関東地方の祭祀遺跡」 中野区立歴史民俗資料館 比田井克仁学芸員
 「畿内・東海地方の祭祀遺跡」 ㈫愛知県埋蔵文化財センター 赤塚次郎主査

懇親会

10月9日（第2日）

視察

科野の里歴史公園（県立歴史館、森將軍塚古墳館、史跡森將軍塚古墳）

4 参加者

56法人、152人

3 指導・研究会・学習会

期 日	講 師	指 導 内 容 ほか
9・4・9	日本地質学会 山岸猪久馬氏	上小地域の石器石材について
9・7・15～17	流通科学大学 南木陸彦助教授	屋代遺跡出土種実の同定
9・9・18	京都大学霊長類研究所 茂原信生教授	屋代遺跡出土人骨・獣骨の同定
9・9・19	考古学研究者 田中義文氏 辻本崇夫氏 松田隆二氏 国立歴史民俗博物館 辻誠一郎助教授 流通科学大学 南木陸彦助教授	屋代地域の古環境の復元
9・9・25～30	多賀町教育委員会 福田美和氏	屋代遺跡出土種実の同定
9・11・10～11	東京都立大学 山田昌久助教授	屋代遺跡出土木製品の研究方法
9・11・12	考古学研究者 桐原健氏 神村透氏	山の神遺跡の調査方法

期 日	講 師	指 導 内 容 ほか	
9・12・18～19	房総風土記の丘史料館	穴沢義功氏	鍛冶関連遺物の研究方法
9・12・24	東京大学	小泉好延助手	屋代遺跡出土ガラスの成分分析
9・12・24	昆虫研究者	輿水太伸氏	屋代遺跡出土昆虫遺体の同定
10・1・13～14	国立歴史民俗博物館	永嶋正春助教授	屋代遺跡出土漆製品の鑑定
10・1・13～14	石川県文化財保存協会	田嶋明人次長	古墳時代の土器の研究手法
10・1・22～23	奈良大学	酒井龍一教授	弥生石器の研究手法について
10・1・22～23	元大阪府立大学	藤下典之氏	屋代遺跡出土種実の同定
10・3・2～3	明治大学	安蒜政雄教授	旧石器時代の石器研究方法
10・3・9～10	明治大学	石川日出志教授	弥生土器の研究手法について
10・3・9～11	愛媛大学	下條信行教授	松原遺跡出土石器の研究手法
10・3・19～20	明治大学	阿部芳郎講師	村東山手遺跡の土器の評価
10・3・19～20ほか	国立歴史民俗博物館 東京大学史料研究所 弘前大学	平川南教授 山口英男助手 鐘ガ江宏之助教授	屋代遺跡出土木簡の解読

4 刊行物

- 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15－石川糸里遺跡」第2分冊
- 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書4－松原遺跡縄文時代編」
- 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14－牛出遺跡、風呂屋遺跡ほか」
- 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25－屋代遺跡ほか弥生・古墳時代編」
- 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1－金井城跡、砂原遺跡ほか」
- 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2－国分寺周辺遺跡、弥勒堂遺跡ほか」
- 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3－更埴条里遺跡、屋代遺跡」
- 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4－篠ノ井遺跡、築地遺跡ほか」
- 「北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書5－浅川扇状地遺跡、三才遺跡」
- 「国道18号線野尻バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書－貫ノ木遺跡、西岡A遺跡」
- 「長野県埋蔵文化財センター年報14」
- 「長野県埋蔵文化財センター紀要6」
- 「埋蔵文化財センターの16年」

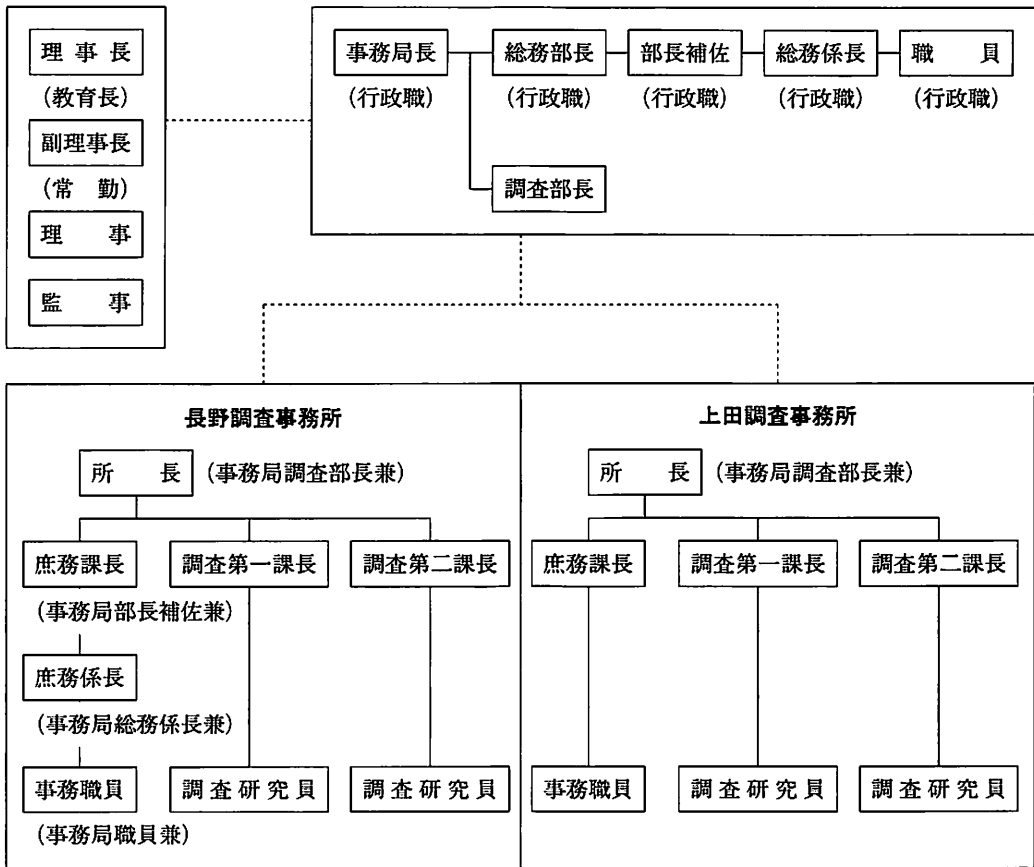
III 機構・事業の概要

1 機構

(1) 組織

[理事会]	理事長 (県教育長) 副理事長 (常勤) 理事 (県企画局長) 理事 (県高速道局長) 理事 (県新幹線局長)	理事 (県文化財保護課長) 理事 (県文化振興事業団事務局長) 理事 (市町村長代表) 理事 (市町村教育長代表)	理事 (県考古学会長) 理事 (考古学研究者代表) 監事 (県会計局会計課長) 監事 (県教委総務課長)
-------	---	--	---

(財)長野県埋蔵文化財センター組織図



(2) 事務局所在地

本部・事務局 更埴市屋代清水260-6

長野調査事務所 更埴市屋代清水260-6

上田調査事務所 上田市下塩尻936-3

2 事業

(1) 理事会および会計監査

- 第34回理事会 平成9年5月30日 会場 長野市 ホテル国際21
 - 第1号議案 平成8年度事業報告について
 - 第2号議案 平成8年度決算報告について
- 第35回理事会 平成10年2月25日 会場 長野市 ホテル国際21
 - 第1号議案 平成9年度収支補正予算(案)について
 - 第2号議案 財団法人長野県埋蔵文化財センターの解散について
 - 第3号議案 解散に伴う残余財産の処分について

○会計監査

平成9年5月27日実施 平成8年度事業報告書および収支決算書について

(2) 調査事業

長野自動車道・上信越自動車道・北陸新幹線にかかる埋蔵文化財の発掘調査―長野県教育委員会からの委託。国道18号線野尻バイパス・国営アルプスあづみの公園にかかる埋蔵文化財発掘調査―建設省関東地方建設局からの委託。国道403号線バイパス・県道整備事業にかかる埋蔵文化財発掘調査―長野県土木部更埴建設事務所からの委託。蓼科ダムにかかる埋蔵文化財の発掘調査―長野県土木部諏訪建設事務所からの委託。調査課職員の派遣。

ア 調査遺跡および調査面積

- 上信越自動車道関係 佐久市地域内 1 遺跡4,000㎡
- 国営アルプスあづみの公園関係 大町市地域内 1 遺跡800㎡
- 国道403号線バイパス関係 更埴市地域内 1 遺跡4,000㎡
- 県道整備事業関係 坂城町地域内 1 遺跡212㎡

イ 整理事業

- 長野自動車道関係 長野市内、1 遺跡の整理事業
- 上信越自動車道関係 佐久市・小諸市・東部町・更埴市・長野市・中野市・豊田村・信濃町内、45遺跡の整理事業
- 北陸新幹線関係 軽井沢町・御代田町・佐久市・浅科村・上田市・坂城町・更埴市・長野市内、30遺跡の整理事業
- 国道18号線野尻バイパス関係 信濃町内、2 遺跡の整理事業
- 蓼科ダム関係 茅野市内、2 遺跡の整理事業

ウ 職員派遣

- 茅野市、原村、木曾郡町村会より要請を受け、埋蔵文化財発掘調査関係の業務のため、調査課職員を1名ずつ派遣

(3) 事業費

長野自動車・上信越自動車道関係：484,350千円、上信越自動車道関係：263,828千円、北陸

新幹線関係：160,620千円、国道18号線バイパス関係：23,435千円、国道403号線バイパス関係：95,500千円、国営公園関係：29,235千円、蓼科ダム関係：10,765千円、側道関係：14,839千円、県道関係：13,398千円、

(4) 普及活動 (28ページ参照)

(5) 職員研修

ア 講師招聘および来所による指導・講習会等 (29ページ参照)

イ 奈良国立文化財研究所関係

期 日	日 数	課 程	参 加 者
10・2・4～2・6	3	年代決定法課程	川崎保

ウ 海外研修

期 日	内 容	参加者
9・12・6 ～ 12・13	我が国の古代文化の源流となった中国古代文化遺跡の研究 ①遺跡・博物館当の見学 華清池、兵馬俑博物館、秦始皇帝陵、陝西省博物館、碑林博物館、 懿徳太子墓、乾陵、茂陵、故宮博物館、定陵、万里の長城ほか ②研究機関等 半坡遺跡館、中国歴史博物館ほか	上田真 藤原直人 桜井秀雄

エ その他の学会関係研究会・研修会・講演会

期 日	発 表 者	内 容
9・6・5	寺内隆夫	「考古資料から探る古代地方豪族の拠点」信濃国分寺資料館市民講座
9・6・20	大竹憲昭	「三万年前・人と黒曜石の出会い」明治大学考古学公開講座
9・6・28	大竹憲昭	「野尻湖周辺でのキャンプ生活」県立歴史館考古資料講座
9・7・13	水沢教子	「屋代木簡が語る古代の人々」信濃国分寺資料館市民講座
9・10・23	川崎保	「瑛状耳飾りから見た縄文文化と東アジア」神奈川県民アカデミー
9・11・22	広田和穂	「律令的土器様式の西東、7世紀の土器」古代の土器研究会
9・11・22	市川隆之	「館とその周辺の村」県立歴史館考古資料講座
9・11・29	水沢教子	「更埴市屋代遺跡群が語るもの」八十二文化財団教養講座
10・1・31	水沢教子	「川原田遺跡出土土器の胎土の肉眼観察結果」国立歴史民俗博物館特定研究会
10・2・10	水沢教子	「更埴市屋代遺跡群出土木簡とその周辺」石川県埋蔵文化財保存協会文字資料集成委員会
10・3・21	桜井秀雄	「長野県の事例」古代祭祀遺跡研究会
期 日	参 加 者	内 容
9・11・25～28 9・12・23	寺内隆夫ほか 水沢教子・寺内隆夫	国立歴史民俗博物館国際シンポジウム 「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」 国立歴史民俗博ミニシンポ「日本歴史における災害と開発Ⅰ」

そのほか、各種学会・研究会・シンポジウムなどへの参加多数

オ 県外博物館・埋文センター・遺跡等視察及び資料調査

期 日	視 察 ・ 調 査 他	参 加 者
9・8・25～27	北海道埋蔵文化財センター、白滝遺跡群他	大竹憲昭、谷和隆
9・10・10	日本考古学協会秋期大会一秋田市	増村香子、寺内隆夫他
9・10・13～15	三重県埋蔵文化財センター、小松市教育委員会他	白居直之、宮島義和
10・2・24～27	滋賀県埋蔵文化財保護協会、三方町立郷土館、他	鶴田典昭、町田勝則他
そのほか、各地の博物館・研究機関などの視察・調査など多数		

カ 全埋文協などへの参加

期 日	会 議 名	開催地	参 加 者
9・4・23	全埋文協中部北陸ブロック連絡会	金沢市	山崎悦雄、小林秀夫
9・6・12～13	第18回全埋文協総会	東京都	佐久間鉄四郎、青木久、池田浩之
9・9・4～5	埋蔵文化財担当職員講習会	東京都	百瀬長秀、広瀬昭弘
9・9・25～26	全埋文協中部北陸ブロック コンピューター等研究委員会	新潟市	上田典男、大竹憲昭
9・10・8～9	全埋文協研修会	長野市	佐久間鉄四郎、青木久ほか
9・10・23～24	全埋文協中部北陸ブロック連絡協議会	岐阜市	小林秀夫、外谷功
9・11・6～7	関東甲信越静地区埋蔵文化財担当者会	蕨山町	白田武正
9・11・20～21	関東甲信越静地区 埋蔵文化財担当職員共同研修協議会	北茨城市	鶴田典昭

キ 長野県総合教育センター研修

期 日	区 分	講 座 名	参 加 者
9・11・18～19	高校地歴公民科	授業改善を図る	川崎保

ク 県内市町村および関係機関への協力・指導等

期 日	市町村等	協 力 ・ 指 導 内 容	協 力 者
9・5・1～10・3・31	歴民博	国立歴史民俗博物館特定研究共同研究員	水沢教子
9・5・28他	中条村	宮遺跡の整備について	小林秀夫、伊藤友久
9・6・17他	長野市	大室古墳群の整備について	小林秀夫
9・11・12	茅野市	聖石遺跡の堆積環境について	市川桂子

ケ 平成9年度市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会

－長野県教育委員会・長野県立歴史館と共催

1	日時	平成9年12月17日(休) 10時00分～16時30分		
2	会場	長野県立歴史館講堂		
3	内容	講演	「発掘調査における安全管理」	
			長野労働基準局安全衛生課安全専門官	柴本重治氏
		講演	「発掘調査における救急対応」	
			日本赤十字社長野県支部救急法指導員	長沢亮一氏
		講演	「史跡三内丸山遺跡の現状と課題」	
			青森県教育庁文化課三内丸山遺跡対策室主幹	岡田康博氏
4	参加者	152名		

コ 資料貸し出し

期 間	遺 跡	貸し出し資料	貸 出 先 ・ 目 的
8・11～9・10	日向林B他 松原 榎田他 郷土	台形様石器・石斧・砥石他 石戈・石剣・人面付土器 鞍・木製農具他 土鈴・三角柱状土製品	県立歴史館「常設展示」
9・6・6～7・4	大久保南	黒曜石集積の写真	明治大学考古学博物館「写真パネル展」
9・9・3～11・22	日向林B他	台形様石器、砥石、他	京都文化博物館「特別展、ヒトの来た道」
9・10・10～11・9	榎田他	木製壺鎧他	飯田市上郷考古資料館「特別展」
10・1・21～3・31	石川条里他	木製品・水田跡等の写真	滋賀県立安土城考古博物館「企画展」
そのほか写真等の貸し出し多数			

サ 同和研修

歴史館職員同和研修会に参加

期 日	講 師	内 容
9・9・3	湯本明雄（長野県教育委員会同和教育課指導主事）	「人権感覚を磨く」

平成 9 年度役員及び職員

理 事 会

理 事 長	戸田正明
副理事長	佐久間鉄四郎
理 事	伊藤 寛 (県企画局長) 所 輝雄 (県高速道局長) 高野一也 (県北陸新幹線局長) 山下四郎 (文化振興事業団理事・事務局長) 小出福子 (県教委文化財保護課長) 宮坂博敏 (更埴市長) 桐原 健 (長野県考古学会会長) 滝沢忠男 (長野市教育長) 神村 透 (考古学研究者)
監 事	風間良一 (県会計局会計課長) 前坂一雄 (県教委総務課長)

事 務 局

事 務 局 長	青木久		
総 務 部 長	山崎悦雄	調 査 部 長	小林秀夫
総務部長補佐	外谷功		
総 務 係 長	田中勝男		
職 員	池田浩之 (主任) 宮沢弘 (主事)		

調査事務所

	長 野 調 査 事 務 所	上 田 調 査 事 務 所
所 長	小林秀夫 (兼)	小林秀夫 (兼)
庶務課長	外谷功 (兼)	山口栄一
庶務係長	田中勝男 (兼)	
庶務課職員	主任・池田浩之 (兼) 主事・宮沢弘 (兼)	主任・小岩一雄
調 査 課 長	百瀬長秀 土屋積	白田武正 広瀬昭弘
調 査 研 究 員	青木一男 石原州一 市川桂子 市川隆之 伊藤友久 上田典男 臼居直之 白田広之 大竹憲昭 河西克造 桜井秀雄 谷和隆 鶴田典昭 徳永哲秀 賛田明 西嶋力 西山克巳 広田和穂 藤森俊彦 増村香子 町田勝則 若林卓	上田 真 宇賀神誠司 上沼由彦 川崎 保 澤谷昌英 田中正治郎 田村 彬 寺内隆夫 鳥羽英継 平出潤一郎 藤原直人 水沢教子 宮島義和 両角英敏 柳沢 亮
調 査 員	中島英子 西嶋洋子 山崎まゆみ	

長野県埋蔵文化財センター年報14 1997

発行日 平成10年3月31日

編集発行 (財)長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007 更埴市屋代清水260-6
TEL 026-274-3891

印刷 信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野市西和田470
TEL 026-243-2105